WASON
HQ
1104
Dec. 1891
No. 294

女學雜誌

第二百九十四號
明治二十四年十二月五日發兌

女性文學史　大和田建樹
震災と國家　しのぶ
孤女院の創立
新小說　ひさご
裁縫の問答　渡邊辰五郎

下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 294. DECEMBER 7TH. 1891.

EDITORIAL:—Orphanage for Girls. (An Institution to be started by Mr. Osuga.)

CHILDREN'S COLUMN:—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

MISCELLANEOUS:—How the Sufferers could be very much Relieved. (Mr. Sakurai) Thoughts on a Sickbed. A Poem. (Heinrich Heine.)

THOUGHTS AND FANCIES: The Lord Judging the Nation.

CRITICAL NOTES:—Women of Europe and America (Mr. Kato.) The Empress Komyo.

THE HOUSEHOLD:—Answers to Inquiries on the matter of Sewing.

CURRENT NEWS.

NOTES AND NEWS:—

第二百九十四號目次

●社說　孤女院の設立、大須賀究一君の決意信念

●兒監　小公子

●雜錄　震災地救濟の一策（櫻井ちか）○病中の感（うゝま）ハイネの詩（雲峯子）

●隨感　天災と國家（しのふ）

●小說　枯尾花（ひさご）

●家政　裁縫問題の答（渡邊辰五郎）

●批評　歐米婦人の狀態○光明皇后○新世帶

●笑ひ草

●時事

●女報

●震地傳道隊報告

●廢娼記事

○全國廢娼同盟會年會

去七八の兩日年會の爲に大演說會を開き、當廿三日其報告及懇談會を明治女學校講堂に於て開く。會員の推薦により、湯淺二郎氏會長席に、飯野吉三郎氏書記席に着す。會に代表して出席せる者、松井浜八、石島良三郎（上毛靑年會）、村松鉄二（山梨廢娼義會）、伊達覺太郎（駿豆義會）、小野坦（伊豆國禁酒會）、小島宮吾（東京廢娼會）、若松菊太郎（盤城平廢娼會）、並木覺太郎（信州佐久廢娼同盟員總代）、寺崎泰吉（廢娼壯年義會）、吉村大二郎（大和廢娼會）、佐々木笑受郎（神奈川靑年會）、其他個人として、渡瀨寅二郎、根本正、津田仙、靑木秀二郎、高田太郎の諸氏等四十名あり。

女學校生「廢娼之歌」を朗唱し、次に議事を開く。第一議案、震災地の寡婦孤女醜業者に勾引さるゝを防禦したる善後の議は、出案者飯野吉三郎辨明の后、種々熱心なる討論あり、最后特別委員十名を舉げ、京濱間に於て其運動に周旋し且つ各同盟會に於て夫々寡婦孤女授業の途を考ふべきとに決す。特別委員は、后刻、渡瀨寅二郎、佐々木笑受郎、根本正、湯淺はつ、潮田ちせ、津田仙、小島宮吾、島田三郎、飯野吉三郎、巖本善治の十名と定りぬ。第二議案は、同盟會機關雜誌發刊の議、巖本氏の出題は異議なく可決し、府下五團體より二名づゝ委員を舉て之に一切の事務を托すると並に各同盟會に於て雜誌二部宛購讀の義務を負ふとに定る。第三號議案、本年の議會に對し、公娼全廢、醜業者政權剝奪の兩建議を一齊に提出すると、各地に於て府縣會に對する運動、議員へ遊說、並に演說印刷物配布等の事を相應にて盡すべき件、巖本氏發題も亦直ちに可決し。第四號議案、廢娼に關する政府の法律の精神を速に實行せられたき旨內務大臣へ勸告するの件、靑木秀二郎氏の發題も異議なく可決し、委員三名を舉て、島田三郎、湯淺二郎、巖本善治の三氏に定まる。

右畢りて、各地同盟會よりの來報、祝詞、及電報の披露あり。北越廢娼會、中國基督教靑年會、岩國廢娼同盟會、松山靑年義會、添原廢娼會、名古屋廢娼會、岐阜廢娼會、中和靑年會、今渡廢娼會、宮城基督教徒靑年會、神戶關西學院靑年會等の書狀並に小野小野三、岡橋淸四郎、松田順平、田沼義高、田中又二郎、山中笑、宮島爲縮、矢野部太郎、等諸氏の報告及び高田靑年會、岐阜後樂學會等の祝詞は、他日廢娼雜誌に記載することあるべし。

右畢りて「廢娼萬歲」の歌を朗讀し、后ち別室にて茶菓を喫し、其后更に富士見軒に於て懇親會を開く、席上、津田仙、石島良三郎、佐々木笑受郎、小島宮吾、飯野吉三郎、靑木秀二郎、寺崎泰吉、野條愛助、並木覺太郎、巖本善治等諸氏の感話あり、午后四時比歡を盡して、別る。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百九十四號 明治二十四年十二月五日發兌

社説

孤女院の設立

大須賀亮一君の決意信念

吾人は今ま近來聞くに稀なる美談を報ずるの樂しみを有す。抑も何如なる順序にて之を述ぶべきかと衷心思ひ煩らふ。心ろ限りなきの喜びに滿ち充つるがゆえ也。

吾人の讀者は本年夏前の女學雜誌に於て、築地立教女學校に最と珍らしき大改革のありしことを讀み、恐らくは今も尚ほ之を記憶せらるゝならん。而して此の美なる改革の容易に斷行せられたるは、監督ヘヤー氏の敏鋭果決なると、彼校從來の女教師諸君が非凡の忠實熱心を示し深く內外の望を掛けられたるとに因ると勿論なりと雖ども、其最とも大ひなる元因は年少眞摯なる女子教育者大須賀亮一君が至誠至熱之を激刺したるにあり。

日に往復六里の道を歩行し、王子の端より築地の端に通勤して、ほとんど終日校務を執り、十數圓の給料を受けて、其過半を義捐し、講話教述の語々涙を以て潤ほす、數名の助教師は其手足の如くに同勞し、生徒總躰は、其一呼吸一謦咳にも掛念するが如き教師あらば何如ん、見聞するもの誰か之に感ぜざらん。大須賀亮一君は即はち其人なり。ヘヤー氏が非常の英斷を以て、西洋女教師を悉とく退出せしめ、一校の全權を悉皆その手に委ね、月に百餘圓の補助を與ふるに拘はらず一切の万事を悉とく日本人の手に任じたるは至當至適の結果とす。

夏以來、立教女學校は一層隆盛に趣むき、其教授の懇なる、其團結の固き、其師弟間の美わしきと、女學校中稀に見る所なり。然るに、大須賀君は此度の天災以來大ひに覺醒する所ろあり。更に一層の熱情を以て往時を反りみ、前行の尚ほ足らざることを悟ると云へり。玆に於てか、晝夜靜念、默慮日を重ね、或夜遂に猛然斷意して、女子教育上、更に一新事業に着手すべきことに決せられたり。

其事業たる、海外に於ては餘り聞かざる所ろにして、吾人も未曾て企て及ぼさざりし所ろのものなり。然れども、其事業

幸ひにして行はれんには、眞誠の女子教育初めて成就し、女學生眞誠の事業初めて自由となり、兼て、憫れむべき境界に墜落する幾多の女性を救濟する功德多からんとす。其事業とは他なし。女の孤兒を養成すると即はち是也。

今の女子教育に從事するものは、何人も皆な同樣の故障に出で合ふべし。即はち、先づ十分に其教育を施こしがたきと一なり。そは、女子を教育すと云ふと近年初めて行はるゝが故に、之が父兄たるもの丶志望兎角に一定せず、只だ流行に動搖して、其愛孃を世論の評判次第に委ぬるがゆへ也。此をもて、入校退校甚はだ不取締にて、確乎、全學科を卒業せしめんとの意氣込あるものは、至つて稀なり。左れど、年限の短長は、事の尙ほ些細なるものなり、氣風精神上の修養に至つては、更に多く衝突を惹起すとあり、抑そも尋常父兄の心中には、其の愛孃に好緣談を得んと欲するの外他意なし、而して所云る好緣談とは、地位高く、黄金多くして、世間の受けの宜しき方に適するにあれば、其愛孃を流行の模型に入れて、成べく風俗一般の趣味に適はせんとを欲するや論なし、此の故に、孃もし精神的の教養を受けて、凜然たる氣風を優姿の裏に包むに至れば、父兄は特の外に驚ろき、たゞ之をして平凡に化せしめ、以て世俗の需めに應ぜんとはなす、苟くも一個の確理應を以て今の女學生を教育するものは、常にかゝる忌々しき出來事に遭遇せん。此等の理由あるを以ての故に、方今十分の女子教育を施こさんと極めて難し。たゞ漸を以て進むの外あらざる也。

次に、今の女子教育者が遭遇する必然の故障更に一あり、即はち卒業女學生方向の事是れなり。眞珠を拾ひて泥中に投げ、白玉を掘りて、火上に燒くは、未だ之を拾掘せざる以前の遺憾よりも遺憾なり。秀々たる女才士、十年苦學業成るの曉、尋常一汎の徒禮に縛せられて、卑劣男子の一生に同伴し、もしくは、拔群の才氣を荷ふて、之を爐邊厨端に埋沒し去るもの多からずとせず。天下の恨みは、人の才を殺すよりも切なるはなし。日本古來類ひあき初代の高等女學生を、見す〳〵泥土の中に委ね去るが如きは、何等、痛恨の事ぞ。左れど、今の女子教育者は、目前あまたゝび此の殘念なる悲事に際會す。

此等の遺憾と列びて、常に吾儕を惱ますものは、女子が醜業

又は醜業類似の途に賣らるゝの一事にあり。我邦下等社會の常態、男子の生るゝよりは、女子の生るゝを以て、吉運となすもの多し。何んとなれば、其子の長ずるに及んで、之を錢に交ゆることを得るがゆへ也と云へり。斯て、下等の茶屋奉公、楊弓店の女、湯屋の二階番、外妾、藝妓、もしくは娼妓など云へる、汚らはしき女の職業公然として行はれ、日本多數の婦女子は、之を以て其專業とするに至りたり。

大須賀亮一君は、多年女子敎育に從事し、亦た其一生を女子敎育に献げんと欲するが故に、此等の實情を視て、久しく慨歎に堪へざりしなるべし。特に、今回の大震にて、尾濃に千百の孤兒を出したる折柄、彼の獸の如き醜業者は、此悲慘の機を千歲一遇の好時とし、直ちに其孤女の買出方に奔走すと聞き、君は遂に猛然として決し、正に孤女院新設の事業に着手せらる。

其孤女院なるものは、決して尋常の孤兒院にはあらず。純然たる一箇の女學校にして、たゞ、孤女を專らに敎育せんとするの主旨に出づるのみ。然れども、大須賀君は、平素ペスタロッチを敬慕し、其敎育法の實施に志あり。故に今回の孤兒院には、純然たる博愛開發的の方法を用ひ、孤女と共に日夜寢食して、遊優出入の內に自づから之を敎養感化せんと欲すと云へり。

而して、君は之が爲めに千圓內外の私產を一擲し、悉とく之を孤女院設立の爲に寄附し、身一錢を遺さず、貧苦を孤女と共にして、其成立と維持と發達とを、只だ天父及び博愛義俠の同志者に請はんと欲す。君は、天下に信仰より外に賴むべきものなきことを知り、亦た犧牲献身の事業の外に樂しきことなきを知れり。千圓の金は、數月にして消失すべし、而して孤女の數に限りなく、而も孤女は一錢も自から捧ぐること能はざるなり。算盤の外に豫算なき人は、何を以て能く此の美なる事業に一身を投ずることを得ん。

立敎女學校が大須賀君の力を他に殺がしむるは、何物にも增したるの大損失なるべし。然れども、其助敎師及生徒は、涙を揮ひ、忍びて此の犧牲を爲せり。而して、生徒中、卒業后は、身を投じて君を助けんと決意せるもの既に多しと聞くなり。

嗚呼、君が孤女院出で來なば、憫れむべき孤女は始めて墜落

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

すべき魔界より救ひ出さるべし、而して女子敎育眞誠の礎茲に立ち、異日その卒業出門の女學生、續々として社會に走せ向ふに及ばゝ、係累なく、束縛なき、女秀才、自由に其才を伸し、或は完全なるホームを造り、或は女論を一變するに足るの事業を成就するに至らん。

天下、何人か、君が美なる決意に感泣せざらん。然れども、凡そ女子敎育に心を傾むくるものは、殊に眞實滿腔の同情を表して、之に助けせんと欲せざるものは莫るべし。君嘗て、書を寄せて云く、あゝ吾が五尺の躰を女子敎育の爲に捧ぐ、それ之を何如にとも用ひよと。君が言は君が實行確かに之を證す、君は女子敎育に全躰全心を獻ずるの士なり。吾人何をもてか之を敬重し、その美なる新事業に熱賛を表せざらんや。君云く、今や、人廣告主義に流れ、何事も吹聽の方多し、此の弊風、吾輩同志者の間にも侵入し來れりと。君が生平慨する所ろ大率ね斯の如し。故にもし以上吾人が記する所ろを見ば、慼然として病まん。左れど、吾人が見し所ろ聞し所ろは言はざるを得ず、吾人は、かゝる美談を細報するとを禁ずる能はず、かゝる義人に對するの同情を促がさゝるを得ざる也。

兒籃

小公子　第十三回（乙）

若松しづ子

女は據なく、引返し升た。容色こそ好けれ、下卑た其顔をこわ〳〵ながら恐ろしい權幕にして。ハ氏は段々と度々面會する内に、此女が非常な癇癖で、行儀は粗暴に卑野計り有つても、談判は中々器用に行かず、又存外度胸も坐つて居ないといふとを發見し升た。時としては、自分ながら大層な請求をし始めたと我ながら氣おくれのする氣味があつて。どの道、これほど攻撃を受けやうとは夢にも知なかつた樣子でした。

ハ氏がエロル夫人に此女の話をして、かふ言ひ升た。

其の婦人といふは正しく、下等社會の人間で御坐り升。何事にも、敎育とか、躾とかいふものは皆無の樣子で御坐り升から、われ〳〵ともと相對して、同等の交際をする術さへ知らず、自分も途方にくれる鹽梅が見えており升。お城へ推參しても、餘程毒氣を拔かれたものと見え升ナ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

イヤ恐ろしい權幕で腹はたてゝも、余ほど毒氣を拔かれて居るのです。侯爵は面會はお斷りになり升たが、手前がお勸め申して、投宿して居る宿へお連れ申したのです。先づ侯爵がお入りになるのを見ると、肝を消し升てナ、眞青になつたと思ふと、俄に猛り立ちまして息もつかず赫して見たり、請求をしたり、イヤハヤ、大騷動で御座り升た。

此時の實況を申さば、侯爵が先づ嚴めしい貴族的の豪の者の如くに、ツカ／＼と大股に室へ踏み込み、突立つたまゝ秀でた眉の下からヂツト女を見詰めながら、敢て一言も仰つしやらなかつた鹽梅は、何か、極く忌はしい物ながら、珍奇らしさに、見る眼を離されぬといふ調子で、只頭から足の先まで、と見かふ見して居られ升た。そして、自分は一向口を開かず其女が疲れ果てるまでしやべらせた後で、

貴樣はおれの長男の女房ださうだ。眞つと、貴樣のいふ通りで、證據が慥かならば、是も非もなく、法律上貴樣の方が勝利だ。萬一さうとすれば、貴樣の生んだ子がフォントルロ｜イに違ひはあいが、事實は土底まで確かめる覺悟で居るから、さう思ふが好いぞ。貴樣の申立が其通となれば、正當丈のとはして遣はさうが、それにしても、おれの息のある中は、貴樣も、貴樣の生だ子も一切眼に觸て貰ふまい。おれが眼を眠つてからは、貴樣ふぜいに、あの城を手もなく蹂躪されるのだが、それは據ないのだ。全躰おれの長男なら、丁度貴樣たちの樣な者に拘らふ奴だと斷念めて居るのだ。

と仰り殘して、其まゝ立つて、ツカ／＼と來られた時と同じ調子に又立去られ升た。

これより數日後に、小坐敷で書物をして居たエロル夫人へ下女が客來を報じ升た。下女は取り繕をして、何かドギマギした樣子で、眼を丸くして居り升た。そしてまだ年若で、ものなれぬ處から、奧樣の爲に非常に氣遣つて居る躰でした。それで、何か恐ろしくて、ピク／＼して居るといふ聲で。

奧樣、マア………あの侯爵さまで御座い升よ。

エロル夫人が客間へ這入升た時、丈高く、凛然とした老人が虎の革の敷物の上に立て居られ升た。其立派な老顏には、どことなく滋味があり、横顏は鷲の顏を見るの趣味が有り、長く延した八字髯は眞白で、容貌は一口に頑固といふ方でした。先ヅ言葉をかけて。

エロルの妻であらうな？

左樣で御座り升。

おれはドリンコートだ。

と言れて、自分の顏を何氣なく、見擧た顏に、我知らず一寸眼を止めると、數月以來、一日に幾度となく、自分と見かはす、げんきあ、愛くるしい、幼ない眼に生寫しなので、妙な心持になり、唐突に、

あの子供は、よくも貴樣に似て居るナ。

御意で御座り升、左樣に申すものも澤山御座り升が、矢張父に似て居る樣にも考へ升て、樂みに致し升ので。

ロリデール夫人が皆つていつた通り、エロル夫人の聲は興に涼やかで、其風采はいかにも淡純に、上品でした。夫人は侯爵の思ひよらぬ御入來を、聊か迷惑に思つた樣子は有ませんかつた。そこで侯爵も、

さうだ、おれの………子にも………似て居る、

と仰しやつて、手持なさに、彼の八字髭を遺恨でも有りさうに、頻りに引張りながら、

貴樣、おれがけふこゝへ來た譯を知つてるか？

アノ、ハヴィシヤムさまにお眼に掛り升たら、今度云々の言立をする人が御座り升さうで………

それで、力の及ぶ限り攻擊する積だ。それでは法律上差支の無い限り、保護する心だから、そのとを言ひに來たのだ。子供の權理は………

夫人は優しい聲で押とゞめ、

たとひ法律がゆるし升ても、正義にかけて所有權のないものならば、決しておとらせ下さりません樣に願ひます。

イヤ、法律上で子供のものになりさへすれば結構だが、それさへ出來さうもないのだ。彼無法千萬の女親子が………

夫人は再びしとやかに、老侯の言葉を遮り、

併し御前樣、其婦人にいたしても、手前がセドリックに對すると同じ情愛を持つて居るとで御座りませう。それで、其婦人が正しくお世とりで有らせられた方の夫人とならば、其お子がフォントルロイ殿で、手前のは左樣でないとは極く明白で御座り升。

かふいふ樣子の素直で一向恐氣のない處は、よくもセドリックに似居て、自分を見る顏附も亦セドリックの通りでした。そ

れで、一生涯人を壓制しあぐんだ身には、却て、心の中に愉快を感じられ升た。何と言ふと、侯爵に反對をいふ人は極く稀でしたから、物珍らしくも、面白く思はれたのです。そこで、態と少し眉を顰めて、

貴樣は全躰子供がドリンコート侯にならぬ方が勝手と申すのだらう。

此時夫人は、花やかな其顏を紅らめ、

どふいたし升て、ドリンコート侯爵と申せば、大した格式で御座り升。併し手前は子供が何はさて置き、第一に父に倣ひ升て、萬事に雄々しく、正義を守る樣致し度ので御座り升。

老侯はかふ聞いて、少し嫌味に、

ハヽア、祖父とはなる可く、正反對に有らせ度といふのだらうナ。

憚ながら御祖父樣にはお知己が御座りませんので、何とも申上られません。併し子供は誠によく信………(言さして、暫し口を鉗み、靜かに侯爵のお顏を打守り)セドリックが御前樣にお懷き申て居るとは、よふく承知致して居り升。

侯爵は極く味氣なく、

どふだらう、貴樣を城へ迎へない譯を知らせても、矢張りおれに懷いたらうかナ?。

どふぞさうは參りませんでしたらう。それ故、手前が是非知らせ度ないと存じたので。

御前は唐突に、

ダガ、それを言はない位の女は、たんとないナ。

と仰つて、益々八字髯を引張りあがら、座敷をあちらこちらと濶歩し、

さうだ。あれはおれを好きな樣だし、おれもあれを愛してるのだ。おれは全躰、誰も好いた覺へがないのだが、あれ丈はどふも可愛いゝのだ。始めから、氣に入つてしまつたのだ。おれも年をとつて生活が慊くあつて居た處だつたが、あれが來て、長生のし加斐が出來たといふものだ。それで、人にも自慢して、おれのない後は、あれが家の首領になるのを滿足に思つて居たのだ。

といつて、夫人の坐つて居た前へ來て、突つ立ち、雜粕にかふいはれ升た、

おれは不愉快極まるのだ。

御様子を覗へば、なる程、さこそと思はれる様でした。平常我慢なたちも、手と聲の震へをとゞめることが出來ない位でした。一寸其時には、凹い武しいお眼が涙で潤んでゐたかの様に見え升した。眼を見張つて、言ふがまだ少し殘念さうに、

おれは非常に不愉快な處爲で、貴様の處へ來る氣にもなつたのだ。一體おれは貴様を憎い奴と思つてたのだ。それから又貴様のことをやつかんだとも有つたのが、今度不名譽極る事件が起つて見ると、萬事の躰面が變つて來た。おれの長男の女房と名乘るアノ嘔吐い女を見てから、貴様と顔を合せれば、却つて氣色が直るかと思つて來たのだ。おれもよつぽど頑固な老ぼれで、貴様に對しては、濟まぬともあらふ。ところで貴様はあの子に似てゐるが、あの子の爲におれも生きてゐる様なものだから、今度の事件で不愉快極まる處から、あの子に似て居る貴様にも逢ひ、あの子を思ふ處が貴様もおれも同一だから、それで、必竟、こゝへ來る氣になつたのだ。貴様も子供に免じて、おれをひどく悪く思つて吳れるな。

かふいはれた聲は左程優しくはなく、いづれかといへば粗暴な様でしたが、兎に角餘り落膽されてゐる様子振りに、エロル夫人は氣の毒さが心に溢れ、立つて、安樂倚子を少し前へ進め、極く優しく、可愛らしく、同感の情を籠めた調子で、

マア、兎に角、おくつろぎ遊しましナ。頃日御苦勞の多いので、餘ほど御疲勞遊していす。存分お厭ひ遊ばしませんでは。

率直に自分の言つたことを反對されるが珍らしければ、優しく、飾りけなく物をいはれたり、眞心から介抱られるのも亦老侯にとつて珍らしいのでした。又しても、セドリックによく似た處よと思ひつゝ、言れるまゝに座に着かれ升た。かく落膽し、かく不愉快を感じられたとは、老侯にとつて、屈強な懲戒で有つたのでしたらう、不幸な遇境に陷なければ、相變らず、夫人を憎くんで居られたかも知れません。併し、今の處では對面が結句心遣りになつたのでした。それに、フォントルロイ夫人に面會された當坐は、何事も比較的に愉快と見たことでしたらうが、況てエロル夫人は誰が見ても、容貌や聲が可愛らしく、

進退も誠にしとやかでした。暫らくする中に、靜かに、温かな週圍の空氣に同化されて、心地が漸くすがく〵しくなつた處で、また、少し言葉を續けられました。

何事が有らうとも、子供の爲には適當の用意はして置くぞ今も未來にもおれが必ず、不自由はさせぬ。

といふて、立かけて、座敷を見廻し。

どふだ？、此家は氣に入つたか？

誠に結構で御座り升。

中々小ざつぱりした座敷だナ、又時々に來て、話しても差支ないかナ？

御意に叶ひ升たら、いつ何ん時でもお入り遊しませ。

そこで、馬車に乘つて、お立歸りになり升たが、タマスやヘンレなどは、今度のなり行の異樣なのに膽を消して、物も言へぬ位でした。

「小公子」に對する國民之友、國民新聞、早稻田文學等の細評は次號に轉載すべし。

文學

女性文學史の發端

大和田建樹

春の始に歸女子うちよれば。必ず歌加留多を取り遊ぶ。この一つにても幼き時より文藝たしなむ我國の風俗を見べし。「春過て夏來にけらし白妙の」は誰も持統天皇の御製なるを知る。「花の色はうつりにけりないたづらに」を小野小町の歌なりと心得ぬもの何處にか有らん。學ばずして此道に入り。苦しまずして此道を樂しむに至るは。そも〵誰が恩ぞや。家に古今集源氏物語の古本あるか。誰がぞと問へば。祖母上の嫁し給ひし日もておはしたるといふ。祖母上の父君は歌人なりしかば。其に受けて祖母上も好まれしと見え。詠草の書きさしなど手箱に殘れり。われもいかで此書を讀み此歌つゞるすべを覺えたきものかなと。童心にも其物を見其人を慕ひて。つひに其事を愛するに至る。外物の誘引も多けれども。主としては遺傳の力これを支配するに基づくべし。かく力ある遺傳の系圖は。祖父母曾祖父母ごときの近に止まらずして。五代十代二

十代の昔の昔に遡るも有るべく。先祖の遺業。數百世の末に至りて顯はるゝ例も無からずやは。わが國開闢以來二千數百年の久しき間に。歌人として撰集家集に名を留めたるは。數ふとも數へも盡ざるまじ。まして名の遺らぬ人にて歌をよみ文を書き得し輩は。濱の眞砂を數取にしても及ばぬほどならん。古への伊勢貫之はわれら先祖の親類なりけんも知べからず。紫式部清少納言の系圖はわが家に幾重縁の關係ありしか。又はかりがたし。さればこの二千數百年間の歌人文人にして。直接に間接に間々接に。或は模範を與へ或は感情を刺激して。遺傳の源と爲りたる幾百人ぞや。遺傳々々種を增し土地を廣めて終に此文學ずきの風俗を成したるこそ盛なれ。

遺傳の力はかくも盛なるを知ば。先祖を敬慕する念いよ〳〵起らん。先祖を敬慕する念いよ〳〵起らば。其傳を讀み其作を味ひ其時代々々の歷史を知らんと欲する希望ます〳〵止み難きに至らん。これ文學史の作あるいはれぞかし。然れども男女その性を異にすれば。男子作者の傳は女子に面白からず。女子の手に成れる歌文はむしろ男子に適せざる事あるべし。類をもちて友は集まり。感情を一つにし嗜好を同じうするは何よりの快樂。天も之を助けて保護せんとぞし給ふらん。さればこそ太郎は父にひかれて花見に行かん事を願ひ。花子は母と共に叔母を訪ふを一年中の樂しみとはするなれ。これ女性文學史の女子の爲に作あるいはれぞかし。

それのみならず。我國の文學史は女子作者の爲に地を占めらるる事多く。ほとんど女子作者の光もて滿たされんとするが如し。殊に中古はそのいちじるきものなり。源氏物語は我國の名文。古今の大作と稱擧せらるゝに非ずや。之を書けるは紫式部すなはち女子作者の一人ぞかし。枕冊子は隨筆の開闢。無比の才筆と珍重せらるゝに非ずや。其作者は紫式部と左右を競ふ清少納言ぞかし。小町伊勢は業平貫之に劣らず。道綱の母といひ赤染衛門和泉式部といひ。にはかに男子作者の下に出べしや。あゝ天のかくまで一方を偏愛するに似たるは。さても果して偏愛せしか。さりとては評者の偏見に依る者か。いな〳〵偏愛にも非ず偏見にも非ず。時勢の然らしめしのみ。男子の手して自ら之を與たるのみ。其故は如何。漢文漢詩の一たび貴族社會に行はれてより。流行に移る人心のあさましさは。今も昔も同じ者にて。理も非も分ず之を學び之を作り。男は漢字

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

もてこそ文をも詩をも物すべけれ。假名もて歌よみ文かゝんなどは女のするめゝしきわざぞと。輕蔑するまでの熱に浮かさるゝに至れり。一方を抑ふれば一方の揚がるは天理の常にて。男子の捨てゝ省みざるもの。却りて女子の社會に活動して此一時微々たりし文學を維持しつゝ。終に永久不滅の光を放たせたるはこれも時なりかれも時あり。さはいへ男子の罪を戒め女子の功を顯はさゞるべからず。されば女性文學史をもて一部分の小歴史とのみ見まじきなり。女性文學史その關する處大なり。今より讀者と共に之を研究し。我等を益し我等を樂しませし遺稿に向ひて古人に謝せん。

時代の分ち

時代をば上古。中古。近古。近世と四つに分つ。上古とは開闢以來奈良の朝の終までを云ふ。先づ純粹の日本語日本思想の時代といふべし。言語にも著るき區別ありて歌人などは古言と稱へ。古言にて綴りたる歌文を古風と呼べり。中古とは桓武天皇の遷都以來後鳥羽天皇の御時までを云ふ。外國語外國思想のそろ／＼入り來りて國語を富ませ行く時代と云ふべし。優美上品の文學は尤も此時に在り。近古とは德川氏の以前を云ふ。外國語外國思想はいよ／＼調和して國語を十分に富ませ得たる時代と云ふべし。自在活潑の文學は尤も此時に在り近世とは德川氏の治世を專に云ふ。種々の文學ありて四分五裂する内にも國學者歌人どもはひたすら古に癖して今を忘れたる時代と云ふべし。然れども戰亂時代の後を承けて。廢れたるを興し絶えたるを繼ぐには此順序に依らざるべからず。されば此順序に依る其時代にありてはもとより然り。今日の古を學ぶものは其跡を直に追ふべからざる事すべてにわたりて心得おくべし。

三名醫

まさを

いつの頃にや英國某女王陛下の御代に名高き侍醫一人あり陛下の信任たゞならざりしに此名醫程なく病に臥し奇特なりしかば陛下殊の外御旨をいため給ひ親しく病床に御下問ありしとき件の侍醫は陛下よさな憂ひ給ひそ臣死するの後尚三名醫のあるあり陛下もし其命に從ひ給へは病も恐るゝに足り申さすと答へ奉りしに陛下は

そは何人を指していへるにや

と問ひ給へば侍醫は更に應へて

ドクトルイーチング(DrEating食物先生)

ドクトルスリーピング(DrSleeping安眠先生)

ドクトルエキザーサイズ(DrExercise運動先生)

といひしとぞ

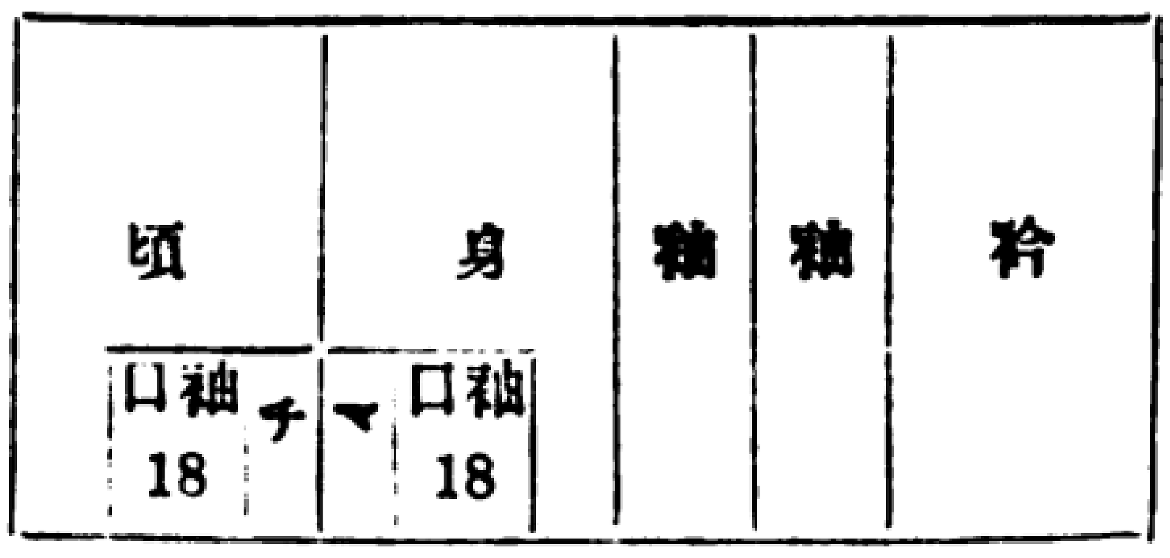
家政

裁縫試驗問題の答

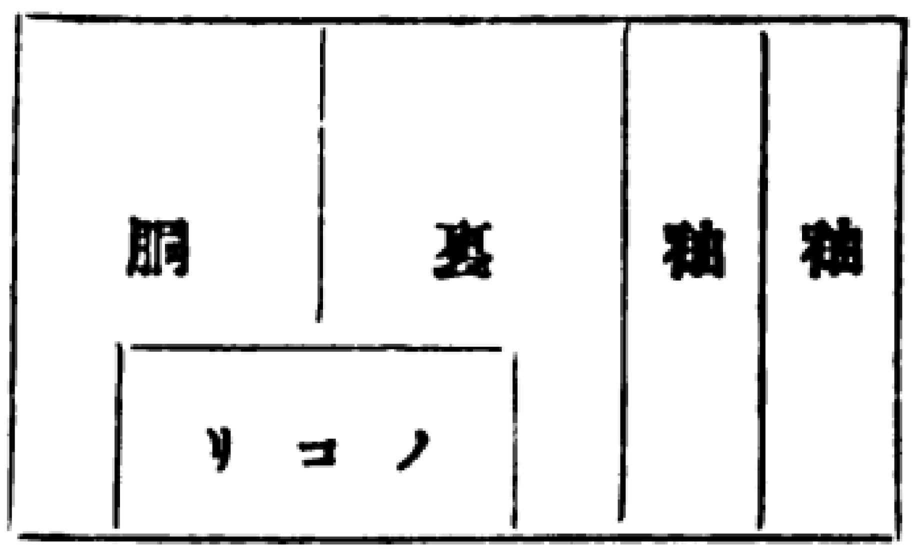
邊渡辰五郎

前々號に出したる問の答は左の如し、

（1）



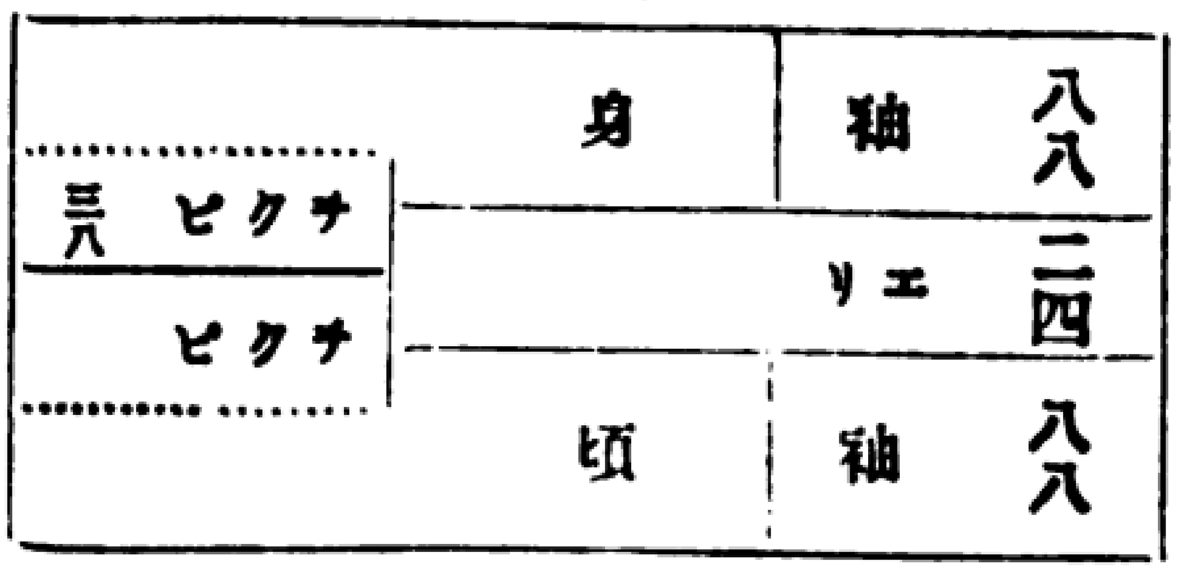
衿丈六尺
袖丈一尺四寸五分
後丈三尺六寸
前丈四尺五寸
出來上り丈二尺五寸
袖口あき八寸
行一尺七寸六分
後巾八寸前巾五寸
衿巾一寸九分
襠巾一寸九分
前下一寸
紐附脊ヨリ一尺



52×10＝250
145×8＝116
250＋116＋25＝391
391－280＝111

解に曰く身の丈十倍さ袖丈八倍を加へ之に衿廻し及下り袖の縫しろ等を二尺五寸を加へて合尺を得は内より表地を減ト殘り裏地なり

（2）

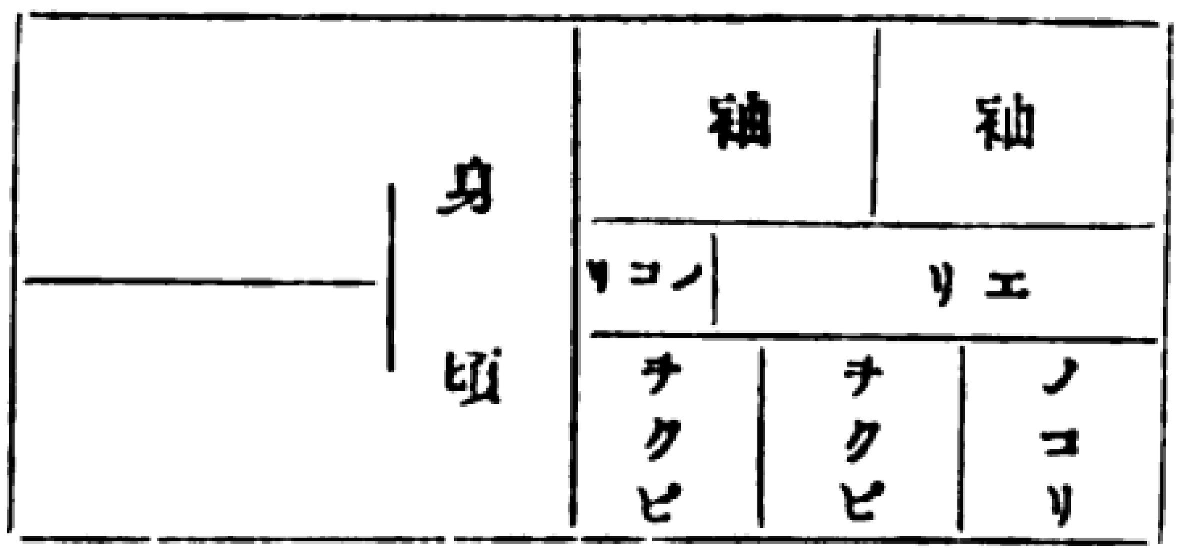


袖丈一尺七寸五分
身の丈三尺七寸五分
但し衿肩は脊に於て縫込

175×235
110.－35.＝75.＝2＝375

解袖丈の二倍を總丈より減ト殘りを二除し身の丈を得るなり

（3）

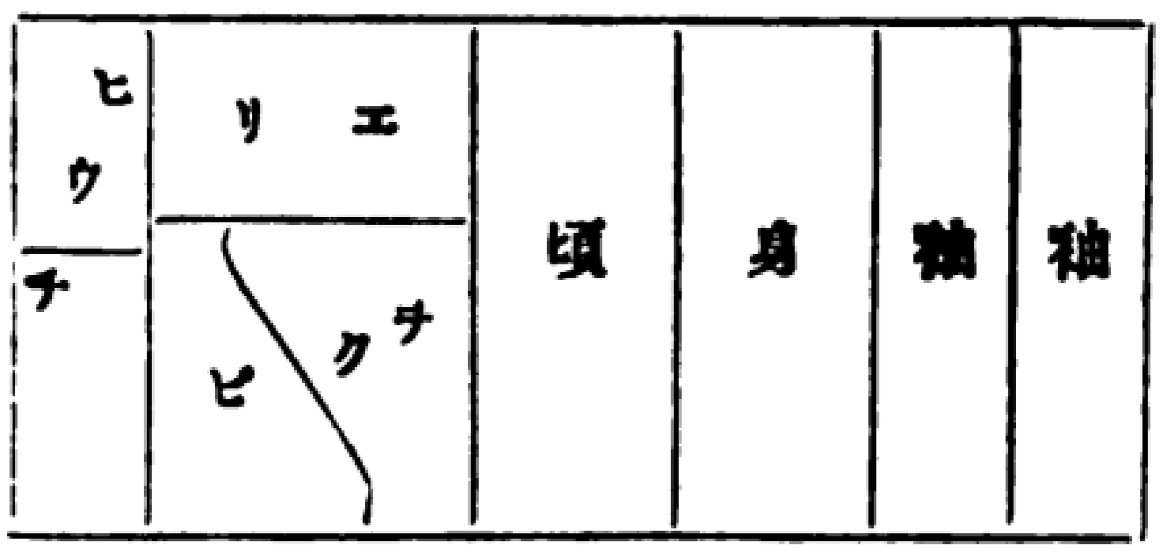


一尺二寸巾に見積り
袖丈一尺五寸
身の丈二尺五寸
袖巾六寸五分
衿巾二寸
衽巾三寸五分

15×4＝60
110－60＝50＝2＝25

但し裏地見積り裾廻切三尺
裏地一丈
袖口中巾にて三尺

（4）

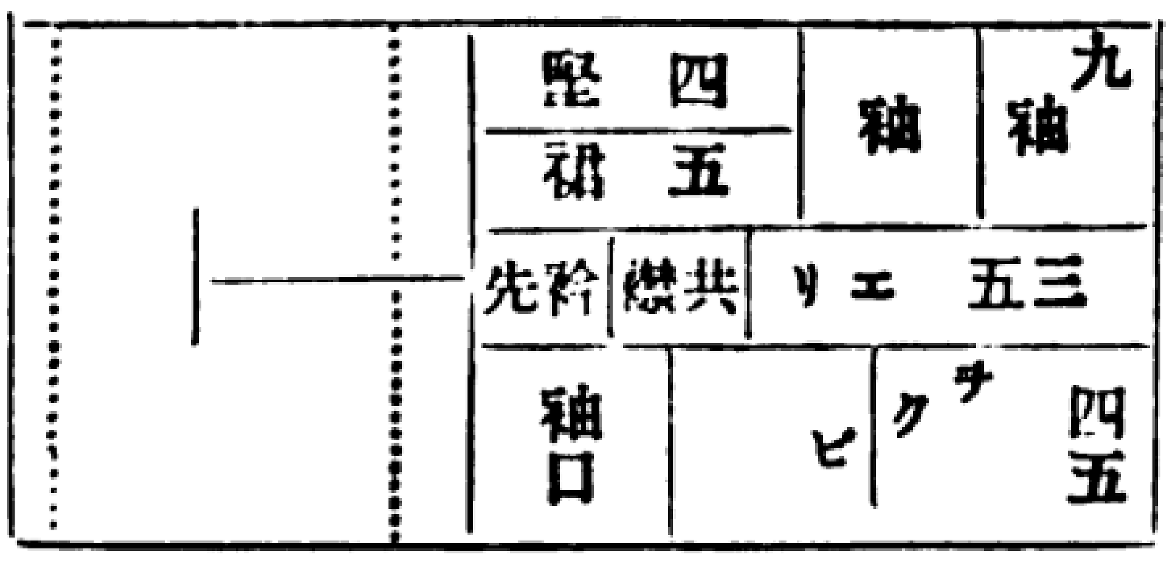


合尺六丈八尺九寸、二丈六尺七寸の見積り
袖丈一尺五寸五分、衿肩二寸七分、丈三尺七寸二分五厘、
衿衽地五尺一寸、衽長サ三尺五寸
裾下一尺六寸、縫切五寸
裏袖一尺五寸五分を二枚一尺四寸七分を二枚身頃の丈五尺四寸二分五厘衿衽地八尺ヒウチの切四寸其他は表さ同樣なれば裁方の圖を省く

15.5×12＝186.
46.5×10＝4650
465.＋186.＝651
19·×2＝38.
651.＋38.＝689.
689.－2674＝23

解に曰く袖丈十二倍さ身の丈十倍さへ裾下二尺三寸より衽下り四寸を減ト一尺九寸を得之を二倍して此者を和して合尺を得
合尺より表を減し裏を得

（5）



41＋15＝56×2＝112
165×4＝66＋112＋27＝205,

一尺七寸巾の見積り、三丈四尺一寸、袖丈一尺六寸五分、裾高サ一尺五寸、堅褄二尺七寸
解身丈へ裾廻し一尺五寸を加へ之を二倍し次に袖丈を二倍し次に袖を四倍し此二者を裏衽二尺七寸を和して用布得るなり
外に胴裏二丈二尺なり

雜錄

○震災救助法に就いての一案　櫻井ちか

這間の震災就中岐阜愛知の震災の慘淒なりしことは皆人の承知する處にして、之を救はんために世の慈善家がいろ〳〵と盡力せらるゝは我謝する處なり。我も何かして彼の苦しめる人達を救はん方法もと兎や角思案のすえに左の如き一案を考へ得たり。

不幸の中にも保ち得たる彼の人達の一縷の命は。多くの慈善家の仕送りたる衣類食物などにて。凍飢の憂なく凌ぎ得たるならんも何分匆卒の際のことゝて足袋まで用意して。此寒さより彼の人達を救ひやりたる人少なかるべし。人或今日の場合足袋などさる贅澤なるものをと叱らるゝならんかなれども。中々實はさるにはあらず。寒さの折柄に足袋を穿くと穿かざるとは一枚の衣類を着ると着ざるとに關はる程なれば。此際足袋を送りて彼の人達の苦を助くること餘程肝要なる事ならん。而して之を爲さんには。新製のものを購ふの事容易なるに如かざれども。さしては費用多くして成功のほども覺束なければ。夫れより諸有志者に其穿き崩したる古足袋を請ひ受け。就中之を男女學生が學生の常とて少しく穿き崩さば一足二足と戸棚の隅行李の底などへ投げ込み置きたるものより貰ひ集め。之れが補綴は之を諸女學校諸教會の有志者に頼み。而して後震災地に送らんには。費用少なくして此寒さの折柄苦しめる人達の多數を救ひ得。中々に益ある救助法とならん。斯して得たる足袋は丈夫にして其効却て新製のものに勝り。又温きことも一倍に。多數の人が此慈仁の事業を分け前する益あり。右は或は已でに爲したりし人もあらん然れど前陳の如く何分匆卒の際注意せざりし人もあるべしと思ひし儘。皆人の就中都會の方々の御參考にまでと申侍る。

○病中の感　ま、う、

おのれ先頃マラリア熱に犯されて臥せり、其病激するや熱度頓に增して頭重く眼を開くの力なく閉目沈思數時間に渉る、人其眠れるやを疑ふ己れは心に思ふやう病は死を報ずる神の聲なりといふ實に人は病あり故に弱きを感ず己が弱きを感ず故にます〳〵正道を蹈まんとす人正道を行ふ茲に死を恐れざ

るに至るなり、今やわが心中何の煩もなく何の恐もなしおのれ此たびは死ぬべき程の病にあらざるを信ずされど彼日來るときも此心はたがふまじと信じては無我無慾病も亦輕きを覺ゆ人あり苦しからんといふ然りされど此病はかくあるものと悟りては今更うめく程にもなくていと心易しとろ〳〵とする間もうれしき夢を結ぶ、僅に眼を開けば愛心を表する多くの贈物は枕頭にあり心を慰めんとする美き草花は机上にあり水を運ぶ兄弟氷嚢を取る姉妹病院に走る使見舞に來る人互に徹夜する女姓隱に憂ふ父老公に祈る親友兄弟の契ある四五十人の心は今日此頃おのが一身に集れるぞありがたけれそが人々の愛心の深きはそれといはねどいと〳〵うれしかりし。

ロレライの歌（押韻）

雲峯

（一）
うきに沈みぬ　わがこゝろ
自から知らず　そがゆえを、
むかしのはなし　記臆をば
はなれがたおき　故なりや。

（二）
すゞしき空も　くれ近み
靜かにながるゝ　ライン河
岸のたか嶺の　岩が根に
匂ふ夕日の　うつくしさ。

（三）
處女のすがた　うつくしく
高嶺に居るぞ　めづらしき
こがねの飾　かゞやきつ
こがねの髪を　梳るなり。

（四）
こがねの櫛もて　くしけづり
やがてひとふし　うたひけり
あたりにひゞく　そがうたは
たへなる調の　おもしろさ。

（五）
小舟をこぎゆく　ふなびとは
憂ふるうちに　そときゝつ
川瀬の礁を　わすれしか
たゞ高嶺をぞ　ながめける。

（六）
つひに小舟も　ふな人も
さかまく浪に　のまれけむ
ロレライうたふ　處女子の
迷はすはてぞ　かくなりぬ。

本篇は獨人ハイチの作にして深意を偶するの歌詩なり、ハイチは今世紀上半期の詩人にして詩想の簡明なると詩躰の單純なるとを以て其作多數人士の愛讀する所なり、本篇亦其一例にして而も最も有名ある一篇なり、原詩は一の譜によりて吟誦するものなれど此には譜を示し難ければ假に七五の調を以て譯出す。

ライン河畔大岩巨石聳立する所河水屈曲し、波激し岩かくれ、水落ち、泡涌くの所危險云ふべからず、近傍の高嶺に嬋姸たる美女、岩石に坐し、夕陽紅に映ずる頃、黃金色の毛髮を垂れ、金の櫛を以て之を櫛り、且劉喨たる聲音を發して淸風にうたふ、誠に人をして魂消え、腹溶くるの思ひあらしむ、舟に棹して河流を下るもの、思はず棹を止め、仰ひて美女を見んと欲す、流水行て急し、舟忽ち激波怒濤の内に入る、舟師空しく魚餌と化す、是彼地方人民の間に行はるゝ怪談なり、ハイチ之を取て一篇の主意となす、蓋し世を諷するの意か。

末節 Ich glaube (我は信ず、或は我は思ふの意)の文字は全く譯せず、「呑れけむ」と云ふ内自ら想像の意を含めばなり、其他必らずしも原字を一々精譯せず、十一月晦前三日　漫遊途上、雲峯記す。

小說

枯尾花　ひさご

某基督敎會に相携へて來る、二人の老婆あり、一人は今の嫁と中合あしく、我家のおもしろからざるより道を求め、一人は共に暮し、一人息子、放蕩の報、久しき病に終りしより道を求めぬとて、共に信仰堅固なり、息子におくれしといふ老婆、ある日我懺悔とも見給へとて、今一人の老婆の淚に沈めるさまをうちみやり、震へる聲によみ上げて、數多の人にしめせしは、この一篇の書おきやうのものなり。

其上

初尾花とめでられし薄もいつしかほなみしらけてすさめられ、めがれせざりし七種の花籠にうつろひ利鎌に刈すてらるゝ秋の末方と成ぬ、實にその花の一時、且笑ひ、かつうれふ、皆おもへば蟪蛄の四時全きをしらざる輩をまぬかれず、今のうれい、後の樂しみとかはり、現の樂しみ幻の憂ひなるをしらず、朝起てさし出る日影の麗らかなる現在を見悅び、驟雨覆盆の夕をはかりしらず、まこと、はかなきよの中かな、むしろしか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

はかなしとしらば、辱多からぬほどこそめでたけれ、今ま更ら何に心のこり、何をたのめ、かく、ともすれば涙ぐまるゝ事ぞ、普天の下、率土の濱、我身を容るゝべき地なく、身の守りと思ひし劔も自らわが身裂くものとぞ成ぬ、今はや、なくべきに涙つき、よを憤るべきに心にぶれり、大概、我國二柱の神の始より、人倫の道さだまれるなるを、いつのよに、かく、犬畜生におとりたる事共を、人のゆるしおく事とは成つる事ぞ。

そはとまれ妾は他にも冒したる罪ある身なり、叱かせしに母屋さらるゝも是非なき事とおもひさだめ、この夜限りに身をおへんとす、かくはかなき世の中に生ながらへ、しのぶべからざる恥をもしのび、堪がたきに堪へて、命めでたく榮ふる人我が心淺く、拙なきを見てわらへ。

妾は八才の時、實母を失なひて、繼母の手に人と成ぬ、繼母は實母のありし時より側女とて家におかれしものにて、四才なる弟も其腹に出來しなり、松とよび捨しものを、母樣と崇ぶことの、何となく心よからず、おもひしやう成しが、學校へ行樂しみにうちまぎれて、深くはおもひたどらず、御隠れに成しと人のいふに、いつかは我母の何方よりか、出こらるゝ事とのみおもひたのめしも後には、其時こそ戀しき心地しつるあれ、繼母は父の出勤の留守に何故となもく妾を鞭打こらし給ふ、泣ば囂しとて打ち、泣ねば性無しとて打ち給ふ、時には弟和郎に繼母が煙管にて姉か頭うて〳〵などしめし給も、父はいさゝかもしり給はざりしやうにて、歸り給ふ、やがても妾をめし出給ふに、繼母はつと妾が側に、すりよりて、妾が髮手を持て搔あげつゝ、見そなはせ、露子のいつ迄もおさなげなる、けふも和郎と鬼わたしして、かしこの柱にて、かくは打ち候ひぬ、痛しとておくに驚きて米嚙み、つけたれども、いまだ、そのあとの殘りて見ぐるし、といへば、父は苦々しく、うち笑み給ひ、汝があまりやさしければ、いつ迄も惡戯の止まぬあり、あどいひ給ひ繼母が手から鞭打しとは弗にしり給はぬなり、子心にも、かなしく、くやしく、恨腸にしみて、忘れがたかりし十一にも成れる頃は、いかでさる鬼の如き、繼母の側に、しのびおられんや、父にうちなき乞まをして、某學校へ入塾しぬ、私學校成りければ、校長ことに心をつくして生徒等を敎育するに、家にありてかく虐待せられたる、妾なれば、直になづき

父にも繼母が憎しみ、おそろしくでかくしおきつる事共校長にはうちかたるに、あはれのものと一方ならず愛し玉ふ、性來このめる學問に、家の事打忘れ、一年も二年も我家には歸らずして日をおくりぬ、或朝、門前を和郎の通り行く姿、見かけしかば、はしり出、よびかけ車より下り立見れば、金鎖りの時計胸のあたりにまばゆく、十歳の子供とはおもはれぬ迄、美麗に洋服着かざりて、指に卷煙草など挾みて、姉よいそぎて行なるに、何事ぞとゝふ、いづくへと問へば、新富へと答ふ、新富とは何なりやと聞に、呵々とうち笑ひ、芝居なり、用あければ又こそ、とて車にのりて又はしりさりぬ、暫し忙然とみやりしが、家にありし時の事おもひ出て、身も震はれ涙そゝろにとゞめかねつ、このとしは十四のとしなり

其中

としのますにつれ、學校に親しみ出來て、一日だに休まじものと勵みしも、さる方なきかなしき事ありて、我家に一月餘り過しゝは我父の死去し玉ひし折の事なり、この時こそ妾、我家に止まりて、死後のとりかたづけもすべきを、何となく繼母恐ろしく弟和郎の妾をしのぐが腹立しく、學校なつかしくて、又學校へ歸りきぬ、其年妾が、十八の歲末繼母よりして、妾を呼びにおこしぬ、行てみれば緣談なり、學校の校長にもかたり聞えしに、いつ迄かくであり果べきにもあらず、たゞ一人にて他に、便るべき人なき身は、とく緣定むべきなりといはるるに、父の存生の折よりして、さる咄しも有し所と聞妾もいさゝか心ゆるされ、翌年に輿入しぬ、先方は母ありて妾を子の如くいつくしみ給ふ、夫は某省の秘書官にて名も高き人なり、妾の薄命を憐み給ひて愛し給ふ事、一方ならず、妾も又今迄乾ける砂原にのみありしものが、俄に櫻花咲みだれ春風うらゝかに吹わたる園生に出し心地して、母親につかへ、夫にかしづく樂しみいふべうもあらず、夫はいよ〳〵名譽高くて年ごとのやうに位階もすゝみ行につれて、妾の名譽もいちじるしくそれの慈善會、これの踏舞會、あすは音樂會明後日は園遊會とて毎日のやうに夫に手を携へられて出あるくに母親留守し給ふが心くるしければ又母親と共に芝居に公園に遊びありきて忙がしさ、いはん方なし、夏は伊加保に暑を避け、冬は熱海に寒をしのぐ、ゆめのやうに五年六年經るまゝに夫の有樣心得がたきこともありつれど、妾は妾の交際に追はれて日々の訪問などに、忙がしく、自然夫婦の間も遠ざかりて一日

の中に顔合せぬ日もあり、夜は夫も交際の爲、某所に一泊されぬとて、直に彼方より出勤さるゝ事もめづらしからず成にき、一日の夕ぐれ、一とせの中に一度の行通もせざりし、繼母きたられぬ、ふるき恨は恨なり、母とよぶものといかでおろそかになしうべき、まして父にはおくれ、家も賣拂ひて小さき家に移り、消光し玉ふをなぐさめでやは、と眞實〳〵しく接待すに繼母はおだやかならず、憂しき面色して、血を分けし汝ならぬに、かやうにもてかしづかれ、又かゝる事いふは心苦しき限など、しらるゝ如く、父の死去り玉ひしより、今日迄の中、種々の物を、賣代なして、和郎の學費とはしつるに、思はぬ難義出きてこはいかにともしがたし、汝は幼き時より才かしこく、母が口きゝ、とりなせしとはいへど、かゝる家にきて榮ゆるは全く汝が徳なり、いかでよき智恵をかし玉へとしほ〳〵と語らるるを聞ば、父が存命の折、いかにしてか、借入れられし金二百圓、今と成て貸主攻め責り公沙汰にも成しとて憂ひ玉ふなり、さ計の事ならば、夫にいかにとも乞受けて、父死後の恥雪ひ候はんと、いひしに、よろこびて歸り玉ひし翌日弟、和郎の來りしかば、とりそろへてもたらしかへしつ、其翌夜いねんとしつる時、下女御實家の母君來り玉ひぬといふ、いぶかしみつゝ出てあへば、妾を見るより取縋り泣き玉ひて、生の子より縁ある子こそまされと人のいふは實なり、和郎はいつか遊びといふ事おぼえて、この頃、家を外に過すと、汝にかたらんがはづかしさに、かくしつればこそ二百圓を騙られつれ、かくしつればこそ二百圓を騙られつれ、とてよゝと泣伏し玉ふ、さらばいかにして、和郎が、たばかりしと、しり玉ひつるぞと問ふに、今いつ方よりか歸りきて、姉より受取りし二百圓は、昨夜一夜になくしつとて大安坐、かきしにくらしさ、打倒しても、やりたかりしかど、明日はいかにしても、二百圓なくてかなはぬ日なり、切角にも正直と人にゆるされし、父君の名を汚がし奉らんも口をしく、いかにもして和郎に調じさせんと、そそのかせども、すゝむれども、たわいなき空鼾して、見もかへらず、今少し程立たば、和郎も卒業して家の助けも、しうべきに、今は何ともかひなし、かゝる歎きをみるこそ若氣の餘り疳高ぶりて汝などにつらく當りし天罰ならん、ゆるし玉へとて泣玉ふ有樣は他に惡心あるべしともおもはれず、共に涙にかきくれぬ。

隨感

○天變と國家

しのぶ

迅雷風烈の時、冠を正しふすべし。斯の時に於て尚ほ警醒せずば、道念何の日にか覺めん。ボルテーア曰く、天地に神なしと、然れども、アルプス山上に雲重なり雷轟ろくの狀を見ば、懼然伏して大能の存在者に泣禱せざるを得ず。人間もし天變の機に悔ひずば、夫れ何の日にか改ためん。

左れば、一國に天の大變降り生ずるの時は、國民警然當に一奮すべきの機なり。此時もし改まらずば、更に大ひなる災わひ、久しからずして踵ぎ至らん。

昔し德川五代將軍綱吉の時、天下の士、太平に慣れて、風骨完たく溶ろけ、慷慨痛憤の氣象殆んど地を拂へり、頭に伽羅油を塗り、足に白足袋を穿ち、絹布の袖を廣くして善く舞ふとを誇る、有爲武勳の談口に絶へて、小歌淨瑠璃に玉を轉ずるの妙あり、僅かに殘生を維持せる古老は坐ろに元和偃武の昔しを慕へど、若ものは甚だ舊弊なりとして嘲けり笑へり、而も、上には、柳澤を愛して男と男、汚らはしき獸行あり、犬は人の上に權を持ちて、萬物の靈畜生にすら及ばざりき、家康以後百年、德川の政治殆んど腐れたりと云ふべし。

此時に當り、天下喧然二個の大現象を吐き生ず。一は赤穗の義士四十七人の忠烈なり。續いで、阿房相摸江戸の間に非常の大震あり、二ケ月間十六萬餘人の死者ありき。元祿十六年義士屠腹し、地震鳴り止むの時は、則はち國民大警醒するの機にてありき。德川の政治之より一度改正せり。降りて亦登ると連山の起伏するに似たり。元祿以來、政治大ひに改まり遂に、八代將軍吉宗、享保の美蹟を奏するに至りて殆んど其絶頂に達しぬ。

見よ、其以後は士風弛むと共に天柱弛み、政氣落ると共に、地維落ち、或は天明安永の、大火大饑饉、大噴火となりぬ。此に於てか、人心再たび警醒し、或は松平定信を出し、或は、水野越前を出し、寛政より、文化文政に至るまで、漸やく、國礎を維持せり。

左れど、外難重なり至り、内政年と共に亂るゝにも關らず、天朝に對して相當の道を履まず、下民に對して必要の政治を施こさず、荏苒狐疑して、内外の難いよ／＼切迫し來るの時

ペルリ再たび來り最後の談判を聞かんとするの時、人心狂亂し政府其任に堪へざるの時、安政二年更に驚ろくべき大地震あり、都民二万五千人一夜にして死しぬ。

左れど、德川氏は復び其流を清むると能はず、當路の人之が爲に警醒するとなし、幕府遂に倒れたり。

夫れ歷史は、國民の上に於ける神の賞罰の記錄なり。國民もし一和せずば、亂れて破るゝの外なし、國民もし輕からば、他に壓せらるゝの外あし、國民もし邪惡あらば、全滅せらるるの外なし。天先づ罰を與へ、屢ば、之を警醒す、而してもし醒めずば、惑迷懶溺の裏、義罰の下に亡滅す。

天よ聞け、地よ耳を傾ぶけよ、エホバの語りたまふ言あり、曰く、われ子をやしなひ育てしに彼等は我に背けり、牛は其主を知り、驢馬は其あるじの廐を知る、然れどわが民は悟らず。

あゝ奈何んぞかゝる國民の上に義罰なくて止まんや。同胞何んぞ警醒せざる、同胞何んぞ警醒せざる。

批評

(108)。歐米婦人の狀態（東京日橋區大傳馬町二丁目　文昌堂發賣定價四十五錢）

久し振にて女學專門の著書に接しぬ。著はす人は洋行新歸朝者加藤政之介君なり。編者が之に序したるものを轉載して其評にかゆ、

世人の過半は巨流に浮べる木の葉の如し。大勢の流行に隨がふのみ。二三年來志士間の流行は歐米に巡禮するとにてありき、而して巡禮の結果は晩近歐米人が熱唱する東方論國家論、勞働論等に感服し、歸朝の日慨然として之を復唱することにてありき。彼地文明の根源を究め、其見ざる底蘊を探りて深く大元因の存するところを穿ち、質素にして而して實多き家づとを齎らし歸る者に至りては不幸にして少し。況んや其齎らし歸んとする者にして偶然目下本邦人の嫌惡する所の者ならんには、決然口を開て之を揚唱すると極めて稀なり。數年前鹿鳴館に夜なかりける頃いは、歐米歸りの才士頗ゝ女子教育論を演說せしにも關はらず、今日に於て純乎たる歐米の女學論を主張するものゝ少きは之

が爲なり。然るに加藤君歸朝後第一の著書を我女學界の爲に得たるは何等の幸ぞ。其論旨に至ては、今の保守家と極端の對敵を爲し進歩的の意見殆んど絶項に達す。余倘瞠若として後に傾首沈思するの快論多し。必しも一々之に賛同すると能ずと雖も、今に於て此種の高論を聞くは、女學界一夜睡眠の翌、朝霧を拂て今爽然鷄鳴を聞くの心地し快氣不可言則ち序を記して此書の公版を祝す。　巖本善治

○光明皇后　旗象子

史海第七卷の光明皇后は、少しく氣焰を欠きたり。殊に面白く感ぜらるゝ創見、例の如く多きはあらず。左れど、此は其題の故によるなり、必らずしも著者が故意にあらじ。

○新著百種十六號〔新世帶〕仰天子著　山月子

夫も妻も當世の小さき好人物、二人が新たに婚し、新たに世帶を持ち、樂しく睦しく暮せるを、月に叢雲の譬、惡漢の爲め思ひもよらぬ不和を來せしも、程なく圓く治まりしとを記す、文章すら〳〵として無難なり、趣向平なれども人をして飽かしめず、思ふに著者よく見る所、聞く所、知る所を其ままに書き現はせしものか、之を彼の知りもせぬ解りもせぬとを、大膽に無鐵砲に書きたる「めつき牧師」「ひつじかひ」等に比すれば、遙に優れりとす。

笑ひ草

下女　この書出しを只今時計屋から持つて參り升た。

旦那　ナニ、時計屋から書出しだと、何かの間違ひだらう、おれは何もとつた覺えはない。

西洋風の奧様　あなたなんですよ、あの鎖の書出しじや有ませんか？

旦那　どの鎖だ？

奧様　ホラ、わたしがクリスマス、プレゼントに上たんですチイ。

隣家の太郎といふ五才の小兒、始めて七面鳥の首を伸べて鵝なるを聞き一旦は甚だ驚ろきたるが又思直せし樣にて、

かあさん、御らんよ、あの大きい鳥は百日咳なんだチ、可愛さうに、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

老成らしき紳士。コレ、おまへさん喧嘩といふものは極く惡るいことですが知りませんか？聖書になんと書いて有升

兼て餓鬼大將にて學校中の弱いものいぢめありし者を懲らし惡せし次郎、此時ニコ〳〵と笑ひ。

をぢさん僕は聖書はまだみんなは讀ないから分りませんがダビデとゴリヤの説話丈は讀んで知つてます

壯年　貴孃が萬一僕の嘆願に對して否とでも仰ればそれこそ僕の一生涯はメチヤ〳〵になり升。

孃君　オヤさうですか、あなたの一生涯をメチヤ〳〵にするなぞといへば大したことですネ。

壯年　は笑ましげにすり寄り。

それぢやアなんといつて下さい升か。

孃君　なんとも言はずに御免を蒙りませう。

甲　の男益もなき人の穴探しに時を移せし末。

君此事丈はこゝ切りに餘所へ漏して呉れ玉ふな、よしか。

乙　勿論だ、併し誰が又そんな事を君に話した。

甲　僕の妻さ、あれも矢つ張り女だ、秘密を漏さんといふ覺悟は一向ないんだからネ。マアあたりまへさ。

時事

○震災地廢娼論

不屆至極の醜業者が、震災地の憫れむべき寡婦孤女を三文錢にて買入れんとするに對し、二縣の廢娼論者運動し、一時之を制止したるが、扨て其善後の策未だ立たず、たゞ彼地傳道隊の人の盡力と、大須賀君今回の發企と、他に職工女として雇入れんとする大需要の二三あるとにより、今や僅かに其方法を得んとす。

○新聞帋

議會開會中は、新聞帋も輿論も殆んど單調とならんとす、之れ面白からぬ事なり。

○基督教會の形勢

神學論も熄み、會內の淘汰も了り、今や信念勃發せんとするの兆あり、祝すべきとなり。

○女子と新聞帋發行

箕浦勝人氏等が提出せる新聞帋法案には、婦女子に新聞發行の權を禁ずるの必要なきとを主張せり。之れ當然の事也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○議會の戰畧

本年議會に於ける民黨の掛引は、如何にも感服の外なし、只此上は、內環割れのせざらんことこそ大切なれ。而して內環割れは主も利益を圖るより發生す、先づ公益の爲に身を獻ずることこそ願はしけれ。

○板垣大隈二伯

板垣伯は布團を携さへ、事務所に寢泊りして、黨員に采配を振れり。誰か其の公明にして熱心なるに服せざらん。大隈伯は今や明らかに改進黨の首領となれり、何んぞ亦公けに出張して板垣伯と相携提諾謀せざるや。大隈伯は蓋し言はん、大將は何んぞ區々として奔走の勞を執るべきと。然れども、伯は改進黨の主領にして民黨全軍の惣大將にはあらず、若し出でゝ板垣伯と至誠至公の合力を爲さずんば、思ふに、二黨の連衡不幸にして破れ、之より引いて民黨內亂の不吉を生ずることもやあらん。故に今は、堂々出陣せんことを大隈伯に促がさずんばある可らず。

○信用組合法

尊徳翁が人に理財の道を敎ゆるや、先づ其心を正ふし意ばせを誠にするを第一とす。蓋し心意正誠ならずんば、百の便法融通あるも、偶たま以て之を陷いるに過ぎざれば也。彼農家を益したる信用組合法案の如き亦た此處より發す。左れば徒らに法律を以て制定すとも、人の心にして先づ正しきに向はずんば、實際に於て奏功すること渉かるべし。今は立憲自治の世なり、信用上に成立つべき小經濟法に至るまで、政府が一々世話することを要せざる也。

○本年議會の委員

諸委員を政黨別にすれば、左の如し、

全員委員長	大東義徹	(巴倶樂部)
豫算委員長	松田正久	(自由黨)
懲罰委員長	山田泰造	(自由黨)
請願委員長	江原素六	(自由黨)

豫算委員四十五名の內

自	十七人	改	八人	巴	五人	自倶	六人
協	四人	無	二人	大	二人	彌生	一人

懲罰委員

自	八人	改	四人	大	一人	巴	三人
自倶	二人						

請願委員

自	十六人	巴	四人	改	七人	無	三人
自倶	四人	大	二人				

自は自由黨。改は改進黨。巴は巴倶樂部。自倶は自由倶樂部。協は審協同倶樂部。無は無所屬。大は大成會。彌生は彌生倶樂部。

議會の大勢すでに明瞭々たり。

〇事後承認

或は云く、民黨は、彼の二大緊急發令に事後承認を與へざることに決せりと。之れ固より誤報にして、たゞ敵を驚ろかさんとするの淺略のみ。民黨にして若し果して然らば、政府は手を拍つて祝せん、何んとなれば政府は、議會を解散するに正當なる名を得るがゆへ也。

〇男學生の柔道

過る日、第一高等中學校に於て、諸學校生の柔道試合大會あり。校友會雜誌第十一號其事を記し、且つ評して曰く、仕合に來りたる諸學校の技量に付き素人評を加ふべし。學習院は熟練、明治議會は術と腕力相半するに似たり。吾校(第一高等中學校)は術長ぜざるに非ず、力無きに非ず、然れども只賴む所須に在つて存するを見る。極言せんか、學習院は華法に流るゝの恐あらん、明治議會鈍つて通ぜざらんとす、我校に至つては柔を離れて西洋角技の如きものに至らん。技の長短は固よりあるべし、願はくは共に柔の道に於て得る所ろ多からんとを。

女報

可愛子編

●大地震に付ての女報(其五)

●皇后陛下の仁慈　今に始めぬことながら、陛下にはこたび震災のことなにくれとなく大御心を傷ましめ玉ひ、あるは慈善會の金員を惠與なさしめ玉ひ、あるは同會々員に機織り糸紡ぐ業を勸め玉ひ、あるは京より罷りし醫師の去らば、そこらの醫師少きを患え玉ふよしなど、過日かの震災地方の爲め出張せし長崎宮內書記官の名古屋通信社員に語りしを傳へ聞きて、濃尾の民氓はその恩召の深きを感じ合へりと云ふ。

●皇太后陛下御參內　同陛下は十一月二十五日宮城へ御參內在らせられ、聖上皇后陛下に御對顏の上京都行啓中の御事を物語らせ給ひしに、兩陛下は同地に於ける震災は至つて輕微なりしを以て、御無事なりしを祝させ給ひ夫より尙種々の御談話等在らせれし由。

●震災地へ義捐　一ッ橋通町なる共立女子職業學校に於ては、教員事務員及び各生徒等より岐阜愛知兩縣下へ向け生徒の作りたる十二歲未滿の女兒に與ふべきフラ子ルのシャツ愛知縣へ百二十枚、岐阜縣へ二百枚金圓若干と共に送付したり。

●子爵土方夫人　は愛知の震災被害者へ、新古着類十八品、縮十六卷、藥百貼を寄附せらる。

●横濱の老婆　孫を負ふて義捐を促し廻はり、濱松某の家の妻己れの帶を解きて罹災人に與ふ是れ近日の雙美(東京日々新聞)。

●東京慈惠醫院　にては十一月四日より今日まで、岐阜愛知の各所に醫士、看護婦等を派遣し、親切に療養看護せらる、該地に在る醫士は昨今十一名にして、看護婦は三十人なりといふ。

●武甲館女學校尾濃罹災小學教育慈善會　は十一月廿九日より五日間神田錦町錦輝館に於て開會し演說、男女の武術(長刀、鎗術、劍舞)等ありたりと。

●關西の青年　大坂基督教青年會は神戶基督教青年會と連合し、土佐堀會館內に尾濃震災救恤事務所を設け、又大垣に出張所を置き、數名の醫師看護婦出張して

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

救助事務を扱ひ居れり、大坂神戸に於て既に千有餘枚の衣類を災地に送りたり。

●ウインピッシュ孃　は震災地へ向け衣類並に附屬品二十四點を送られたり。

●各婦人會の義捐　東京新榮教會の婦人會にては金一圓◎東京日本基督教會有志婦人は金八圓二十四錢◎番町教會有志者、婦人會、日曜學校幼年生より合して金三十二圓◎若松婦人矯風會よりは金一圓二十錢◎橫濱婦人慈善會よりは衣類八包◎栃木信徒婦人會よりは金一圓〇七錢◎大阪婦人友愛會にては雜誌印刷費中より金十圓、會員並會友中有志者より出でし金十五圓、合せて二十五圓◎廣嶋婦人慈善會は金五十圓、何れも震災地へ寄附せられたり、◎又丹波峯山町の婦人會員は各慈善家に就き古着類を集め、目下已に三百餘點に及びたるを以て、何れも薄て其洗濯に從事し不日罹災地方へ廻送する等なりと。

●各女學校の義捐　名古屋金城女學校にては金八圓三十六錢八厘、外に無名氏五錢◎名古屋清流女學校にては一圓四十八錢◎廣嶋英和女學校にては金九圓三十錢◎靜岡女學校にては古着一包。何れも災地へ義捐せられたり。

●震地傳道隊への義捐　は別に廣告せり、就て見るべし。

●藤井米八郎氏　震地傳道隊の一人なる同氏は、孤兒九名を携へ來りて、築地救育院に托し、自分は府下の明治女學校、女子學院、明治學院、婦人矯風會、三一神學校、橫濱の共立女學校、フエリス和英女學校、其他京濱の各教會、各靑年會に於て、該地の景況及び所感を訴へ、大に奮起する所あらしめたり、金錢衣類多く集まれり、牧師にして彼地に赴きたる者あり、靑年にして傳道隊さならんさ決心せし人あり、看護の爲めに行かんさする婦人あり、氏は希望さ感謝を胸に滿へて、去る二日夜汽車にて京地を出發、再び彼地に赴かれたり。

●震災地人民の飲酒　岐阜縣笠松の如きは、義捐救與の金をもて酒を購ひ醉を買ふ者ありさ、該地に働く人よりの報知あり、是れ棄て置くべきに非ずさて、津田仙氏より「日の丸」二十部を、東京禁酒會よりは、禁酒問答、布哇禁酒槪況、酒の害など、該縣へ向け送りたり、尙「日の丸」さ酒の害千部づゝを岐阜愛知二縣へ送る積りにて、津田氏は近々の內、該縣に赴き演說せんさ申さるゝ由。

●中嶋夫人の國會傍聽　十一月三十日の帝國議會には、中嶋議長の夫人俊子、傍聽に出でられたり。

●前田正名氏の夫人　殖產上の事には頗る熱心の聞へある貴族院議員前田正名氏は目下麻布笄町の自邸内に種々の試驗田を設け自から來耜を取りて婢僕を指揮し居る由なるが、本年は母堂もり子の米豁を祝する爲めさて、同氏の夫人は愛兒養育の傍ら晝夜桑葉を摘みて數百枚の蠶兒を飼育したるに、上簇の結果殊の外大出來なりしが、夫人親から之れを絲にし、先頃上州の織師に送り羽二重及び綸繻類を織らしめたるに、總て十五反即ち七疋餘の反物に出來上れり、之れを一反平均六圓さ見積るも總計九十圓の高價なり、以前は農商務次官、山梨縣知事の令夫人なり、大厦高樓に住ひし婦女子の細腕を以て、シカモ五名の愛兒養育の傍ら、斯る業務に從事する感ずるに餘りあり。

●東京府秋季檢定試驗小學高等科裁縫教員及第者氏名　佐藤さく、山本のぶ、早房ゑん、河野はま、水山くに、竹內たけ、宮武寅代、淸水れん、淺野ふさ、鈴木せい、玉木りつ、加賀美政子、三森かれ、源ひで、淺非きて、鈴木玉枝、木下さら、和田きん、小林ふゆ、（以上拾九人）●同授業生及第者氏名　小幡ひで、浦野ひで、佐藤こま、齋藤ふじ、戶村やす、宮部いち、長谷川ひで、加納せん、武山やす、松岡しげ、淸水つれ、奥村しか、平塚さだ、山中たけ、土岐かれ、池尻ふさ、（以上拾六人）。

●東京府下に於ける出產女さ死亡女　十一月十日乃至十六日の一週間內の調査によるに、出產屆出の女子百九十七人にして、死亡屆出の女子百九十四人なりしさ。

●一夫一婦の建白　婦人矯風會より帝國議會に呈出せり。

●萬國禁酒會長ウイラード孃へ宛て　東京婦人矯風會及其他の有志者米貨二十弗三十六仙を送りたり。

●廣島女學校　過般の火災は、基督教徒さ市民さの間に、同情相愛の炎を揭げしめたり、罹災の不幸は却て信徒の勇氣を增さしめたり。

●婦人の說教　白河に於ては、十一月十八、十九、二十一の三日祈禱會婦人會を開き、牧師及びフエルプス孃及び山田小梅孃の講話ありたり、二十二日日曜學校にて同じく二孃の講話あり、夜に入りて又演說ありたり聽衆は二百名許。

●山陽英和女學校　は明治十九年十一月一日岡山市東中山下八十一番邸に立てり本年七月初めて第一回卒業式を施行せり、現今同校所有の財產は地所千四百四十二坪、校舍一棟、塾舍一棟、器具五百七十九點、書籍二百二十七部、「オルガン」

二臺、其他の附屬品なり。

●大阪梅花女學校　の卒業生にして將來有望の聞ありたる松田きた子は肺患にて死去せり、方に年二十三才、死する時の遺言は朋友知人に傳道するとにてありしといふ。

●山梨英和女學校開校式　は十一月二十三日擧行せり。

●福島縣下の女學　同縣下に於ける學校の女訓導は三十二人にして、其給料最高は十九圓、最低は三圓なり、授業生の女は三十五人にして、其料給最高六圓、最低三圓なりといふ。

●高知縣下の女學　縣下學齡修學男女の比較は、男百人に付き、女五十五人二一に當り、前年に比すれば其比例二人强を增せり◎公立小學校の教員は三十二人、授業生は四十三人◎小學女教員の給料は、最多額九圓、最寡額三圓五十錢、授業生は最多額七圓、最寡額二圓◎中學校女學部の女教員は三人、生徒は百一人、卒業女生は十八人◎師範學校女生徒は目下五十名あり◎高知英和女學校は教員男五人女四人、生徒四十五人あり。

●栃木縣下の女學　縣下公立小學校に於て女訓導たる者二十一人、授業生及助手四十一人◎中學校內に設置せる女子高等通學科は教員三人、其他本校教員に兼任せしむる者數人あり、本年中入學せし生徒は十三人、年末現委員は三十五人にして前年より三人を增せり、同學校は昨年四月以來改正規則を實施し、初めて女子に適當の學科を授く、たゞ學事裁縫は敎室狹隘にして充分之を錬習せしむるとを得ず◎師範學校には女生徒十二人あり。

●久邇宮の追悼法會　故朝彥親王殿下の爲に去月廿五日は瑞龍寺村雲日榮尼同寺に於て法要を修せられ、各女王方の御代香として奥女中さめ子參拜、又同日久我晉圓尼公も知恩院の別院新善光寺にて法要を修せられ、女王御代拜として中﨟上田益子を遣されたり、其後又本派本願寺に於て同法要を修し邦彥王殿下より御代參を差向られしといふ。

●久留米紡績會社　福岡縣久留米に設置せる同社は同縣三池紡績會社に比し其構造は稍小なるも、其製糸額は遙に其右に出で、目下一日の製糸七八千斤の多きに至れりと云へば、三池紡績會社と東西に相對するに至るべしと云ふ。

●刺繡傳習所　香川縣大內郡三本松村の有志者金澤平喜といふ人、從來同村の婆態として振はず產業の起らざるを憂ひ、多年の計畫を經て外國向刺繡の傳習所を同村に開き、德島縣人にて梯寅吉の此道に堪能なるを以て之を教師に聘し、目下職業なき姉妹を集め共々該業を授け居る由なるが、日ならず同村の產業として見るべきに至らむと同地の人はいへり。

●貸座敷廢止　（十一月廿六日午後零時卅分鹿兒嶋發）縣會は大多數を以て貸座敷營業を向ふ三年を期して廢止することを可決せり。

●千葉縣通信　千葉產婆學校にては去十月、七名の卒業生を出せり◎千葉幼稚園は園主小杉くら子の熱心により追々盛大に趣き、目下廿餘名の生徒あり。

●福嶋縣通信　◎育兒會　福嶋縣耶麿郡若松町には曾て同郡の爪生岩女史が發意に係る育兒會設置の計畫は、喜多方町長土屋氏村田秋山の兩郡書記、其他警察署長中村氏、直間稅分署長島田氏等の諸氏與て大に力ありと云ふ、目下其筋へ認可請求中の由、本會の目的は專ら墮胎の惡弊を洗除し貧者の產兒養育を計るにありと云ふ、左に該會の効績を擧げん。若松新横町田事ナヨは貧苦の內に懷妊中、不幸にも夫に別れたる後は、哀れにも女の手一ツにて細々と四人の小兒を養育し居りしも、令度出產する小兒を合すれば五人なるより、產婆福島サンは其不幸を憫れみ何くれとなく手の屆く丈け世話をなし、出產の時は如何樣にもして養育の道を立てやらん抔と世にも賴母しき言葉を力に辛き月日を送り來り、月滿て去月二日玉の如き男子を分娩せしかば、產婆福島サンは取敢えず此趣を若松育兒會へ申出で、同會より先以て金五十錢惠與され尙此后も月々金五十錢宛と時服一と通を與ふることに定めたりと、却說該會にては貧苦の中に出產したる事にもあれば、母子の健全も如何あらんとて、其翌日佐藤勝治氏は態々同家を訪問せしに、產婦は已に針仕事なをし小兒の衣服を縫ひ居たるが其衣服たる素より荒布の如き襤褸にて寒氣を防ぐべくもあらざれば、氏も酸鼻の情に堪へず、尙若干の金を與へ種々慰めて立歸りたりとぞ。

●山陰道通信　（第一報）◎雲州松江。女風は京大阪に似て優雅（みやびやか）なり、先づ衣裳の縞摸樣髮の結び樣帶のメ方抔宛然京雛の如し、欠點を申さば只柔和に富みて淸冽の氣概に乏しかるべし、同地の嗜好は茶の湯にして是れ驚く計りなり、裏店に住む今日暮しの老婆も悠游として茶をたてる抔頗ぶる風流に荒めり、されば娘等は何より先きに茶の湯と生花を學び、若し之を習はざるものは日常の交際も出來ずとなんいへり、一體之につれて優美の風に流れ勇壯の氣に乏し、嘗て同地に參られたる某令尹は頗ぶる擊劍を好める人なりしが、令尹の曰く此茶の湯の末藝に凝る風をば一朝にして予の尙武の氣象に化し去らんと、土地の人之を痛く惡しくや感じけん、激して曰く、彼の武骨の令尹をば此茶の湯を以て仙化せしめんと、一時世の噂となるに至りしとなん云へり。

通信子此頃松江の市街を步み其女兒の樣を見るに、成程優にやさしき方なれど今は追々世につれ行くを見し、參々伍々學校歸りとも思ぼしき二八の娘達がマチ高の袴に靴をば穿ち輕快に步む樣抔いと心地よかりき。

松江病院は縣立のものにして隨分流行すると云へり、通信子はる或病めるものを

携へて到り、此病院に感心せしは先づ受附が女子たりし事なり、其外係りの人々も何となう女子の手でする事が多き樣にて、最と喜敷思はれたり。

◎伯州米子。同地の風は越後の新潟、出羽の酒田などに彷彿たり、女子は汚行を以て恥とせず「思はれもの」「抱へられもの」杯になるは女の榮と思ふ程なりと云ふ、併し婚風の事業は何方も行はれぬはなし、目下外國婦人の來りて傳道するものあれば面目を改むる亦遠きにあらざるべきか、畑忠太郎といへる人あり、廢娼の事に勉めて頗ぶる青年輩を怕れしむと云ふ。

◎因州鳥取。は昔し頗る士風の盛なる所にてありしが明治廿年頃遊女場の出來てより男女共風俗を失ひ今は甚だしと云へり、左れど潔白を好むの人亦なきにあらず、故に二ツの婦人會あり、各々女學校を有す、一を鳥取高等女學校と云ふて多く保守派の婦人達が設けたり、生徒は五六十名にして何れも短机に座して諳習せり、昔への寺子屋の如し是れ彼の國粹てふものを衛するの意か、但しは他に譯のあるのか、他を鳥取英和女學校と云ふ、是は進歩的の人々或は外國婦人の共立に係ると云へり、四五十の生徒は鼓もあどけなく物學びせり、何やらん溫厚にして且ッ清潔の風あり、是は前の保守學校の反對とも云ふべく、隊を組みて朗吟し、又體操をなせり、末頼母敷ぞ見へにける。

◎伯州倉吉。飛白の産所にして婦人は皆此飛白を織るを以て業とす、近來製絲所の設けあり、二三百の紅女は常に屯集すれど、牧ふものなき羊の如く危哉岌々乎たり、此町二千石餘の商買盛んの地なれども彼の妓樓等なくして居れるが、何ものゝ痴漢か妓樓設置を唱ふものありたり、されど清潔の青年に駁せられ、到底目的を達するとは能はずと云ふ。

●婦人の衛生監視員　グラスゴー府の衛生監視員中に近年婦人を用ゐるとなり、現員五人あり其給料は一週一封度にして、常に極貧者の借家住居を爲す者多き部落を巡回し、毎戸に就き其清潔なるや否に注視し各戸の婦女を奬勵して清潔法を行はしむるを特務とせり、此婦人監視員を設けし以來殊に著しき成績を見る由なるが同府の衛生監視長ビートル、ファイフ氏晩近の年報に據れば、同氏の役所に附屬する婦人監視員が一ヶ年貧民部落を巡視したる戸數四万七千百三十二、内八千四百四十二戸は今回始めて巡視したるものにして皆不潔を極めしが、說諭の後五千四百六十八戸は再度の巡視の節には皆清潔になりたりと。

●女子の大學教授　コラマクドナルド孃はウイチミング州立の大學の歷史科教授となり男教授と等額なる千五百弗の俸給を受らるゝと云ふ。

●自から其人の傳記を綴る。ヘンリーワァードビーチャー夫人は已が其人の傳記を「余が知る丈のビーチアー氏」と云ふ名目にて十月發刊のレデースホーム雜誌に掲載せりと云ふ。

●飲酒の結果驚くべし　英國の一新聞は一の統計表を掲げ報じて曰く同國にては酒飲む夫の爲め非道の死を遂げたる婦人の數一千八百八十九年より一千八百九十一年に至る迄三千〇〇四人ありしと云ふ。

●カナダの太守スタンレー卿　はヴイクトリア女皇陛下よりレデーマクドナルトにマクドナルド男爵夫人の名譽を與ゑんとの勅命を受たりと、實に當然の榮譽なるかな。

●來る一千八百九十二年五月に於て開かるゝ大會はメソデスト教會にてウエストヴチイジニア同盟會よりはベルリンのマリサ、ポチツト孃、インデアナ同盟會よりはインデアナポリスのモルガン夫人を各々常置委員として又カンサス同盟會にてはユーゼニアセントジヨンを牧師代理として任撰せられたり、されど此事に關しては恐らく來らんとする大會に牧師の代理として婦人を撰み行べきや否やの問題の起るとならんと云へり。

●日本全國卒業女學生姓名一覽（學校創立より、本年四月に到る、）

●地方の部

●新潟女學校　阪口貞子　玉木直子。（合二名）。

●新潟縣尋常師範學校　田中いぬ子　脇野つい子　山本きわ子　大關かう子　蒔田すが子　高田せん子　本間すわ子　井上さや子　上野かつ子　土屋はな子　栗原さよ子　本間ゑい子　奥田さく子　岩佐ひろ子　島山たか子　佐藤てい子　田村あい子　林つれ子　小山ちい子　平井かく子　兒島てる子　藤井てる子　木宮ひろ子　中島ふぢ子　矢澤きやう子　高橋むつ子　板垣なを子　野村しづ子　竹内よしの　町田かつ子　野村はぎ子（死亡）　坂口てつ子（死亡）　近藤さよ子　近藤みち子　横澤のぶ子　小林ふぢ子　近藤くま子　本間きい子　佐藤いつ子　白石ゑつ子　野口いく子　新保しい子　藤井みの子　山川てい子　小柳のわ子　鈴木たけ子　仙石たけ子　嶋ふさ子　梅川まき子　江口しゆん子　藤島こめ子　川崎いよ子　三宮まつ子　藤部たつ子　内山ひでじ　塚田つぎ子　星野あさ子　宇佐美はる子　木村かづ子　齋藤きく子　近藤しづよ　原田ふく子　中澤はく子　丸山ぶん子　三本やす子　山本しづ子　竹本つる子　尾崎てい子　蒔田すみ子　坂口しん子　本間せい子　田中ちゆき　古澤よせ子　竹下よし子　堀田かづ子　原なみ子　横山ふく子　高田りつ子　渡邊さわ子　佐野ます子。（合八十一名）。（内二名死亡）。

●鳥取縣尋常師範學校女子部　渡邊さみ子　永野たつ子　錦織竹香　星野つな子　藤原さい子　山内さみ子　堀内さい子　上野ます子　鵜飼のぶ子　本多ゆき子　菅岡きく子　朝元あい子　廣田つる子　三原たい子　諏訪せん子　二瀧せい子　松村ゑい子　朝山げん子　福田よし子　田川きよ子　志立ゆき子　園山ゑつ子　神門とも子　由井ろく子　松島げん子　阿部ます子　伴すず子。（合二十七名）。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大鐘先生調剤
髪のこやし

毛のはへる香油

一名 **美人かつら**

大瓶 金三十錢　中瓶 金二十錢　小瓶 金十錢

此美人かつらは極々清浄なる植物油をうすめたるものに髪をこやし毛をはやす効能薬を加へたるものにして男女常に髪化粧に用ゆれば髪をこやし髪の發育を盛んにし髪の抜け落てはげる事なくしらが赤毛となる事なし又髪のうすきを厚くしほそきを太くしのぼせなどのうれいなくふけやできものなど生ずる事なし又産後病後などに髪の抜け始めしときは少しも早く塗用すべし抜け毛を止め毛あしを速くする事妙なり又既に抜け落たるあとなつぼしできものやけどのあとなどに塗り附ればおのづからいつとなく毛のはへると眞實なり
男女殊に髪化粧に最も適當のものにして髪はさらさらとしてつやをもちねばつきあせ臭き等のうれいなし用方小なる筆か小ばけにて髪の根に塗り又は常の水油の如くして用ゆべし

發賣本舗
東京市京橋區銀座一丁目
つやぶきん本舗
佐々木玄兵衛

寶薬同盟會員
銀座二丁目 岸田吟香
上横町 安川榮次郎
村松町 岩濱長藏
両國米澤町 大木口哲

瀬戸物町 玉置金八
銀座三丁目 松澤八右衛門
池の端仲町 宇田治兵衛
元大坂町 高木與兵衛

本石町二丁目 森谷萬次郎
馬喰町一丁目 平尾贊平
小網町四丁目 黒澤利兵衛
本町四丁目 松本伊兵衛

神田小柳町明治水本舗
神田一ツ橋町小間物店
淺草駒形町小間物店
同黒船町樂屋洗粉
下谷下車坂町角櫻香油本家
同 同町免許薬舗
同下車坂町免許薬舗
日本橋區通二丁目小間物店
通油町南新道小間物問屋
同坂本町角薬店
日本橋區室町三丁目紳薬本家
横山町一丁目小間物問屋
同二丁目鼈甲問屋
四ツ谷傳馬町小間物問屋
赤坂一ツ木町角洋物小間物店
麹町區三番町免許薬舗
麻布永坂町保玉散本家

明治堂薬舗
鶴屋
中嶋百助
梅紫亭宮城
さかいや
吉川亀太郎
宇藤秀太郎
柳屋五郎兵衛
村田藤七
德田多助
資生堂
天野源七
江川金右衛門
山形屋定次郎
松宮
雨下
堀

小石川諏訪町一等散本家
本郷五丁目薬舗
同眞砂町薬舗
横濱尾上町薬舗
同所曙町一丁目薬舗
同伊勢崎町一丁目小間物店
同辨天通四丁目角唐物店
同住吉町五丁目かなけぬき
同吉田町一丁目二十番地
同太田町四丁目唐物店
武州八王子八日町小間物店
相州横須賀旭町
同所大瀧町薬小間物店
同汐入町寶薬小間物店
相州横須賀汐留町小間物店
同所小田原緑町小間物店
青森縣弘前市本町

花樂堂
高嶋文藏
尾澤若生堂
鈴木亀藏
中見亭太郎
小池金次郎
信の屋長二郎
加藤品太郎
松葉屋芳五郎
山田又助
大谷仁助
澤平屋金之助
松本源次郎
山本賀平
小西屋金兵衛
油屋久次郎
武田恒七

越後中條町
下總佐倉鍋町
駿州吉原洋物居
同靜岡縣洋物屋
山梨縣甲府錦町小間物店
仙臺大町四丁目小間物店
福嶋大町洋物店
長野縣旅籠町
山形旅籠町五丁目
福井佐久下町
靜岡呉服町五丁目
山形旅籠町
磐城平四丁目寶薬店
函館末廣町小間物店
熊本市細工町二丁目
神戸元町鐵飴本舗

桂屋正藏
鴻野屋和助
佐野屋熊次郎
日下部現七
松田屋七右衛門
高橋藤七
米山商店
中野商店
渡邊正三郎
木村捨松
伏見屋善藏
鈴木又七
加藤定吉
新田太平
紅屋治三郎
横田孝史

神戸元町一丁目薬舗
廣嶋市播磨屋町
廣嶋市細工町薬舗
大坂四ツ橋南詰ドクトル丸
同心齋橋筋安土町洋物問屋
名古屋本町四丁目
岡山市上之町六十一番邸
播州姫路福中町
西京柳馬場四條上る
加州金澤片町紫雪本舗
上州高崎唐物小間物店
越中富山二番町
秋田土手長町
奈良縣奈良町字西寺四番地
福岡縣下博多中嶋町角五樂堂跡
長崎縣佐世保元町

赤井筒中村寶薬店
福井成美堂
高坂萬兵衛
本林丁子堂
大崎組商店
土屋惣兵衛
細謹舎
赤井筒支店
田中庄兵衛
龜田伊右衛門
若林勝三郎
清水安兵衛
新田目小助
加治新三郎
藤井支店
朝日奈支店

震地傳道隊報告

婦人矯風會錄

○震地傳道の景況

川合信水

嘗て湯谷氏と共に震災地に赴かれたる藤井米八郎氏は、該地の孤兒九名を從へて、去る二十五日來京せられたり、親しく傳道の景況を聽くに、前途の希望滿々、實に皇天に向て感謝に堪へざるものあり、請ふ左に余が巡回中に未だ見聞せざりし、又これ迄の報告に未だ載せざりし事を、同氏の談話中より拔きて左に記さん。

人情の輕薄腐敗　名古屋地方の輕薄なるは誰しも知る所なり、諺にも名古屋の名物は女と何々なりと、物品の中に數へ込まれてある位なれば、女子の藝妓などするは寧ろ名譽の如く思ふ者もあり、人々の歸依する寺の僧侶にして娼妓を身請けして妾となす者さへあり、之を詰れば、僧は答へて、余は口に釋迦の言葉を傳ふる者なり、余は固より凡夫の余なり、余が口に佛語を傳ふるは恰も電柱が音信を傳ふるが如し、即ち余は電柱なりと、僧侶既に然り、其他は推して知るべし、車夫の如き、一日勞働し歸り來りて挽茶一杯を飮むとを此上なき樂とするとか、地味よくして耕作に豐かなるより民心總じて懶惰なり、嗚呼此人此民、今日にして若し警醒せずんば、何れの時か警醒すべき、傳道は實に最急最要の務たるなり。

恐るべき弊害　人を救はんと欲するの金、人を殺すの金とならば、吾人豈恐れざるを得んや、彼の縣廳、郡役所を經て與ふる一般義捐の金品は、其配附方に日數を要し、之が爲めに種々の弊害起る、中に就て尤も恐るべきは、縣廳、郡役所に於ては、其明後日與ふべきものは、今日に之を通知し置くを以て、輕薄懶惰の細民等、之を當てにして、其間二三日の日子は、殊に怠りて何をもなさず、善後の計を考ふる者の如きは極めて稀なり、大垣の如きは此前二度も大水ありて、義捐金を貰ふの習慣つき居れば、今日貰ふも感謝の念誠に乏しく、當り前の如く思ふ者多し、故に義人が涙痕滿々たる金品も難なく無益に有害に之を遣ふ者少なからず、もし此金此品にして、傳道隊の手にあらば、如何に有益に如何に活かして用ゐるならんに。

基督教徒の働　醫士と看護婦と、傳道隊靑年の働きは、彼の地の人心を動かせり基督教は嫌はるれども、基督教徒は尊信せられ、敬愛せらる。

岡山孤兒の働　岡山の孤兒は救濟軍と名くる一隊を組織し、旗を立て喇叭を吹き、岡山市中は勿論、中國筋を巡回し、彼等自らが印刷せし旨意書を配附して、家々に義捐を求めたれば、見る者聞く者涙堰き敢へず、我も〳〵と義捐し、殆んど一千圓く近の金集り之を災地へ向け送られたりと、嗚呼可憐なる愛兒達よ。

震災地の孤兒　大凡六百名の孤兒を、岡山孤兒院は大奮發にて三百人ほど一手に引受け養はんとす、殘三百人は東京、横濱、大坂、神戶にて養はんとを望めりと。

未來の傳道隊　孤兒を養ふとは、非常に大なる結果あるべし、今日養はゞ、例せば十二歳の兒ならば、五年間基督教の精神主義もて養成し、十七歳の頃には自己の思想を言ひ顯はすとを得べし、人は抑も鄕里を慕ふ者なり、彼等の慕ふ所鄕里にありとせば、彼等は必らず鄕里の爲めに未來の傳道隊となりて働くべし。

貧民の職業　笠松に於て、三澤氏夜巡回せしに、藪の中に音する者あり、近づきて視れば、貧民の掛を破りて藪中に伏せるなりけり、大垣の如き職なく業なく、饑と凍に迫れる民多し、之を救ふと目下切迫の務なり、其務たるや彼等に職業を授くるとを要す、乃ち傳道隊は大阪よりして價安く職業に用ゐる道具を求め、大工に左官に其他の民に與へ、又資金としては日賦、もしくは月賦等にて三圓或は五圓を貸すとゝなし、其他或は柿賣、蜜柑賣等の業に有り附かせ、其他奉公の口入等は、大阪靑年會より來りし傳道隊よく引き受け働かる。

廢娼運動　娼妓を買ひ出さんとして入り込む者あり、傳道隊は之を防ぎて頗る力めたり、岐阜縣下に於て藝妓八人、衣類家具等を燒かれて詮方なく卿ち居る者あり、大坂靑年會の一人行きて誠實に之が爲めに說く、彼等感じて正業に復せんといへりとぞ。

貧兒夜學校　小學校燒けたり、倒れたり、幾百の兒童學ぶに處なし、之を放任し置かんか、看る〳〵惡に傾かん、乃ち大坂に於て、貧兒夜學校を設くるの計をなす郡書記永田正敏氏、郡長と相談の上、自分の家を學校に貸與せり、永田氏の妻君自ら孤兒の食物など拵らる、感心すべきとなり。

八人決死第二の大垣を作らんとす　慘たる燒跡、狹きテントの中、同志の人八人(小橋勝之助、宮崎利道、沖田金次郎、本田淸次、村田里、湯谷磋一郎、本鄕定次郎、藤井米八郎)涙もて集り、凜として坐し、百三十二番の讃美を歌ひ、互に祈り互に死を決して、第二の大垣を見るまでは去るとをなさゞるべしと誓へり、モーセが埃及の野に祈りしも斯くやと思ふ心地せりといふ、壯なる哉、勇ましき哉。

善後の策　救濟の第一は負傷者治療、衣食給與等にして、其第二は貧民の相談相手となり、之を助け之を救ふ、即ち今傳道隊の働く所なり、其第三の正面傳道は今後に必要なり、病院の如きは早晩引き去るものなり、此引き去る以前に、傳道者赴き、引き續きて傳道勞働くとを可とす、是れ實に注意すべき大切の機なり。

●震地傳道隊會計報告

第二回

入の部

二十五錢四厘　第一回報告殘金

三圓　(廿四日)　三州豊橋西八丁　清水貞子

美以教會婦人有志總代　井戸石子

一圓　横濱上野町二十番地　淺井柞子
五圓七十錢（廿九日）　築地立教女學校　愛心會
五十錢　明治學院　生徒二人
一圓　本郷　本郷教會
一圓　牛込　無名氏
五圓　兵庫縣神東郡栗賀村　太田よね子
二十錢　丹后竹野郡網野村　谷田茂子
十五錢　岩井せき子
十錢　横田いく子
五錢　谷田せつ子
三十五錢（廿六日）　アナタノ弟子ノ一人
二圓廿三錢五厘（廿七日）　信州松本美以教會日曜學校生徒幼年有志者
二圓三十錢（廿八日）　青森縣東津輕郡浦町村六十二番地田村東穗
二十圓（廿九日）　横濱　無名氏
十五錢　三一神學校　無名氏
五圓三十一錢（廿六日）　鐵道局より孤兒滊車代半額寄附
一金二十四錢　甲府花園町一番地　林友惠

總計四十八圓五十三錢九厘

出の部

十五錢（十八日）　矯風會諸會へ端書代
五錢六厘（廿日）　諸教會へ發書の封袋代
一圓〇四錢五厘　諸教會及林、石島、押川、佐々木、諸氏へ發書の印紙代
十五錢（廿七日）　諸青年會へ端書代
六錢（廿七日）　石島、拾田、淺井諸氏への書狀印紙代
廿七錢（廿六日）　孤兒迎用車代
十五錢（廿六日）　湯谷家へ電報
廿五錢（廿七日）　湯谷磋一郎氏へ電報
五圓五十錢（廿九日）　古田くに子持參
十五錢（廿九日）　大垣本部へ電報
三圓五十錢（卅日）　小野坦氏持參
卅五錢（卅日）　湯谷磋一郎氏へ電報

計十一圓六十三錢一厘
殘三十六圓九拾錢八厘

品名	十二月三日
白米（一円ニ付）	
一等米	九升八合
二等米	一〇〇
三等米	一〇三
四等米	一〇六
五等米	一一〇
正米（一円ニ付）	
越中米	一斗三升八合
美濃米	一三九
尾張米	一三一
一志米	一三七
忍領米	一三一
雜穀（一円ニ付）	
本貫大麥	二斗八升五合
上州小麥	一八〇
竹林麥	一八〇
梅澤大豆	一九七
青柳大豆	一九〇
吟小豆	一七〇
白胡麻	一三三
黑胡麻	一六〇
鹽（一円ニ付）	
赤穂	叺 三、一二
大鹽	三、二二
本齋	五、〇五
新齋	五、五五
醤油（一樽ニ付）	樽分厘
最上 / 極上 / 上物 / 中物 / 並物	七四　七八　八七　一、一〇　一、二五　一、五五　一、七二　一、八七　二、〇五　二、五〇
味噌（一円ニ付）	
地製上白	貫 七、〇〇〇
同上赤	七、〇〇〇
同紅赤	四、五〇〇

品名	十二月三日
吳服（一疋ニ付）	
白大巾縮緬上	円 三〇、〇〇
同中	二五、〇〇
同下	一九、〇〇
白中巾縮緬上	二五、〇〇
同中	一九、〇〇
同下	一二、〇〇
白紋縮緬上	一六、〇〇
同中	一四、〇〇
同下	一二、〇〇
白曾代絹	八、〇〇
同中	五、〇〇
同下	四、〇〇
銘撰上	八、〇〇
同中	六、〇〇
同下	四、五〇
色甲斐絹上	五、二八
同中	四、三〇
同下	四、〇〇
白斜子上	一八、〇〇
同中	一三、〇〇
同下	八、〇〇
白浮織上	一〇、〇〇
同中	八、〇〇
同下	七、〇〇
紅地平絹上	六、五〇
同中	五、八〇
同下	五、〇〇
枋尾紬上	九、〇〇
同中	七、〇〇
同下	六、〇〇
節糸織	七、五〇
同並	六、〇〇
仙臺平上	一六、〇〇
同中	一四、〇〇
同下	一二、〇〇

品名	十二月三日
絹糸（一円ニ付）	
本練花紺色	匁 二六〇
同色物	二五〇
羽二重糸色物	二四〇
延糸太筋	三二五
芥子糸色物	二六〇
同薄色	二四〇
匯天色物	二三五
色物太練	二五五
紡績器機糸	四五〇
乾海苔（百枚ニ付）	
大森上々	錢 八五
大師河原上々	八五
潮田上	六〇
砂村上	六五
製茶（一貫目ニ付）	
山城江州稀大頭	円 二、五〇
同稀頭	二、一〇
同大頭	一、八〇
同中頭	一、五〇
同中茶	一、一三
狹山稀大頭	二、〇〇
同大頭	一、四五
同中頭	一、三〇
水油（一樽ニ付）	
地水	円 六、八〇
胡麻	一〇、三〇
荏油	一〇、三〇
桐油	五、九〇
綿油	六、五〇
坂油	七、八〇
石油（一箱ニ付）	
チヤスター	円 一、四九
デボース	一、五〇
ホーキ	一、五一
ロシヤ	一、五一

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

早稻田文學第四號目次

釋義　詩經　信夫恕軒氏　萬葉集　畠山健氏
講述　德川文學　關根正直氏　論理學　大西祝氏
評註　丹波與作　䕫庭篁村　キマクベス　坪內逍遙氏
雜錄　國文朗讀法　關根正直氏　歌話　千葉梅園氏
一居士の寄書
時文評論　●飜譯すべき外國文學●某哲學者よりの寄書●詩といふ字●方今の漢文學●青年文學會●早稻田文學會●國文學大家●新刊
附錄　早稻田文學評判集
八犬傳諸評答集　䕫庭篁村氏

十二月一日發兌

東京牛込區早稻田
發行所　東京專門學校
仝神田區一ッ橋通町
發賣所　有斐閣

次號豫告

一、野口寧齋氏の詩話は本號に掲ぐべき筈の處同氏に恙ありて讀者の望を充たすことを得ざりき次號に於て必其端緒を發くべし

一、讀者の渴望せる鷗外漁史のシルレル傳は次第に其本相を發揮して興味うたゝ堪然たらん

一、次號に於て掲ぐべき森槐南氏の寄書は氏が獨得と稱せらるゝ支那小說傳奇の字義起源迹迁等を論じて餘蘊なし特に其五大奇書の畧評の如きは讀者をして覺えず案と拍つて嘆賞せしむるものあらん

正札引なし

新形
流行

○はおり紐　品々
○帯留類　品々
○時計紐　品々
○メリヤス　品々

右ノ外組糸一切御好ニ應ジ精製仕○御進物等ニ美麗ニ調進仕候

組糸老舖
日本橋區よし町
佐竹勝兵衛

○御用ノ節ハ御報知次第參館仕候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

喜久福丸

小袋 金壹錢 大袋 金貳錢
小箱 金貳錢 大箱 金五錢

妙蟲水

小瓶 金八錢 中瓶 金廿錢

本鋪
東京神田區松富町五番地
舊御成道の横町
守分堂
長尾民之助

詩文添削批評

河村巖城先生主任謝料隨意●諸郵券代用●返稿五日間改正詳則ハ郵券貳錢送致次第進呈スベシ

陸奥國弘前代官町
華月館

注意

本館ハ專ラ文學ノ普及ヲ圖ルノ主意ナレバ如何ナル初學ノ詩文ト雖モ勉メテ丁寧精密ニ添削批評シ及ビ男女老少ヲ問ハズ苟モ詩文ノ研究ニ從事セント欲スル者ハ皆喜ンテ館員ノ盟ニ加ハルヿヲ諾ス

小兒診察
日本橋區本石町三丁目十三番地
中川幡之輔

裁縫教員廣告

裁縫及造花刺繡毛糸編等出來得る女敎員有之候間御入用の御方は左の所に御報知の程を乞ふ

本鄕區東竹町廿五番地
和洋裁縫傳習所

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄など掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む.

廣告定價

一行 一回 (廿七字詰) 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評することあるべし。

雜誌定價

一冊	六錢	郵稅。	五厘 (但府內無郵稅)
十冊	五拾八錢	郵稅。	五錢 (同前)
半年分	壹圓四拾六錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

發行所
東京市麴町區下六番町六番地
女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

詩文添削批評

河村巖城先生主任謝料隨意諸郵券代用返稿五日間改正詳則ハ郵券貳錢送致次第進呈スベシ

陸奥國弘前代官町
華月館

注意

本館ハ專ラ文學ノ普及ヲ圖ルノ主意ナレハ如何ナル初學ノ詩文ト雖モ勉メテ丁寧精密ニ添削批評シ及ビ男女老少ヲ問ハズ尚モ詩文ノ研究ニ從事セント欲スル者ハ皆喜ンテ館員ノ盟ニ加ハルコヲ諾ス

小袋 金壹錢 大袋 金貳錢 小箱 金貳錢 大箱 金五錢

小瓶 金八錢 中瓶 金廿錢

本鋪
東京神田區松富町五番地
舊御成道の横町
守分堂
長尾民之助

小兒診察
日本橋區本石町三丁目十三番地
中川幡之輔

裁縫教員廣告

裁縫及造花刺繡毛糸編等出來得る女敎員有之候間御入用の御方は左の所に御報知の程を乞ふ

本郷區東竹町廿五番地
和洋裁縫傳習所

廣告定價

一行 一回 (廿七字詰) 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評するとあるべし。

特別廣告は婦女に關する協會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

雜誌定價

一冊	六錢	郵稅。五厘	(但府內無郵稅)
十一冊	五拾八錢	郵稅。五錢	(同前)
半年分	壹圓四拾六錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

發行所
東京市麴町區下六番町六番地
女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三